播州名所巡覽圖絵

二

播磨名所巡覽圖會卷之二目錄

長田神社　本社　八幡　勅書御供不未社　村上焼窯
長田の里
明泉寺
盛後の墓
蓮の池　蓮の河
弱林　日松
尾池
忠度塚
溪の繼橋
まの〳〵橋
白ひの梅
知章孝孔圖
軍賢忠孔圖
吉祥の池
盜人松
古井の畑
松瓜　村雨
二人墓
八幡宮　後池　雀　槻　鶴　紀矢
鷲の尾の屋
義經椎木

兵庫より諸方紀程

○上りの法

楠公碑へ　六丁
生田へ　廿六丁
布引滝へ　一里余
菟原塚へ　三里
まやさんへ　二里半
ちうげへ　三里
あしやへ　四里
西の宮へ　又里
尼ざきへ　七里
神崎へ　八里
大坂へ　十里
京へ　十九里余

○下りの法

和田岬へ　又丁
長田へ　廿丁
須磨寺へ　一里半
一の谷
男川へ　二里
あしへ　又里
三木へ　七里
姫路へ　十四里

○紀路の方

むろへ　二十里
とも へ　又十里
宮浦へ　九十里

聖靈權現　勝福寺

須磨
紀平俊任
幸代宮神祠
須磨寺
芭蕉翁碑
道羅川
二ノ谷
大五輪石塔
義経の
猿頭坂
牡丹坂
岩家

須広の浦
月上坐
月見の松
教政薬師
本堂 護広堂 鐵寺堂 十王堂 馬頭観
二王門 義経腰掛け松 紀平竹 若木橋
巻雲の滝
村上帝霊跡
三ノ谷
男川 摂州 播州
奥畑伝兵衛家
大山寺
多壺
山田

須広籠
茶田氏故家
重衡松
一ノ谷 義経松 義経腰掛け
須広関屋 須広滝口 須広塩屋
梅ヶ鼻
本蒙石
蛤水
烏滸
多聞寺

源氏ノ子
籠の井
綱敷天神
光源氏旧跡
安徳天皇行宮
熊谷平山二三懸
塩屋
妹背の松
蛤水神社
舞子の濱
大義谷譯

八幡宮
脇坂
赤羽神社
明石
月山
若乗寺
狐坂
惣門
密蔵院
宝蔵寺
赤石
朝雲陶器

稲荷神祠
両馬川
妙見社
月の浦 月浜 月海 月瀬 月泊門 月沼 月里 月沢
岩屋神社
平清盛石塔 明石八石ノ碑
無量光寺
明石川
山王社
蘆沙碆
坂上寺
松江

忠度塚
月照寺 盲扶橋 たち谷塚
明石鎮城
御茶屋
長林寺
岡部の松
海士乙女碆塚
紅上の城趾
林村城址
和坂村
小澤橋城址
大岡松

休天神
人麻呂社
幸松寺
楼寺
午臥天王
日輪寺
月見の松
皇子村
林村
十輪寺
枝吉城址
大久保譯

墨石明神　清水堂　清水川　葵江浦
江井が浦　魚住浦　名寸隅新溯　魚住城址
住吉神社　開伽寺　林崎池　如意寺
本堂　護广堂　観音堂　三時堂　岩幼堂　三重塔　鐘楼　山門
慶明寺　住吉神社　榛谷城跡　日輪寺　夜叉神　老室松
惣社　勝法輪寺　八幡宮　日奥社　伊川城址
近江寺　社石権現　明王寺　性海寺
齒朝梅
清水寺　神出城址　雄子尾雌子尾　最明寺　時宗　夜啼松
本堂　藥師堂　岩幼堂　三時堂　鐘楼　三神山古戦場
三神川　阿弥陀堂　二層塔　奥院　赤松氏墓
瀧野古城　瀧野　日川　光明寺　光明寺陣所
鳴尾山　引尾山

長田社
祭神幸代皇命
攝社二社
末社に社
名居乃氣い小地の
乃風の峯
石塊多い村上天望
乃御寄附かり

長田神社 長田村にあり 樹木より垂松二丁許民家を経て社あり式内にて例祭八月十日武庫郡村祭礼を 長田星 兵庫より北丁斗西にあり 日本紀に長田の星と云へり

日本紀神功皇后記に云事代を命皇后に誨て心を長田の國に祭主と

告給へりと云へり 兼山嬢の牙長嬢を以て先と祠し云 即三韓より

還らせ給へり附のゆゑにて生田のゆゑ同じ

社記に云村上天皇康和三年七月十五日雨と長田の社に降る○又大蛇の

ゆあり 蛇人形を三ゆ余社の中の森より造出す 東屋池の御祓所へ神輿

を寄せ 其人形を生田村の濱にてかのまゝ人形とさんぐゝに切捨る 先三韓退治の

表似なりとぞ又山附西濱広の系田氏を宮家と称す

按ふに蛇人像と切捨るゆ先蓋の後の造ゆるべし 源氏物語濱広のもらひ人像

と見へたるゆ及べし 又和泉式部六月もらひ歌

ゆふすゝきなつさねとてのさの系ときりにさりてもらへつるゝ

明泉寺 長田村の 天照山と号す 本尊大日如来 〻〻大伽藍なりしと考へり 兵乱より荒廢す一谷合戦城中

城中茶臼盛俊墓 長田村名倉池の傍 塚あり 城中茶臼盛俊の一谷の級軍より逃て逃るべきなれども先に一人残て逃合て戦ひ

が猪股近平六則綱と組て引組て馬より落重俊の空へとる大力の若者なれば

廿人力にて内力に六十人にて上下もる大組を一人にして扱ひ乱れ七八十人力もみぐゝれば

近平六の及ぶ所にあらず推付て首をおんとるる小名弥太郎ばかりなれば下よりも名

乗を弱みくさそい旅歩の出合さり仮りて彼が首を取りばやとひ重俊の云ゆう

与御辺則綱が命を助け長し給へ 重俊の云ゆう 和及并に親しき人〻とるべき

やさんと濃しく〻 重俊歎びて云く 我は男女の子ども二十余人持さらば彼ホ

のみを乞ぐとて已に御恩をぐゆう 家の人とも 弟の曽後の水田ゆる布の

中の時のみふ三人屋打うけて物語して 重俊が池沙とゆ 左右のゆゑ

力とへ共逆さまの綱の源田八宮 側に臥のみの屋に吳る岸の塚ゆ配んくとしるる

不武則綱上ゆりて首と掻切る刀の先ゆ貫きえ〻 捧げ馬ゆりて馳入る

蓮乃池 長田の西の方にあり 年家陣中の文ゆ多 広百六十歩ばかり 紀基養ゆの助け拯う

蓮の河 池のふもぎゆゑ 〻〻の古人紀基の河と入り其実いまゝ

駒林松 駒林の氏遠乃地名なり 松を松林のゆなり 光源氏のゆは俗説之今二系の松なりとて一樹

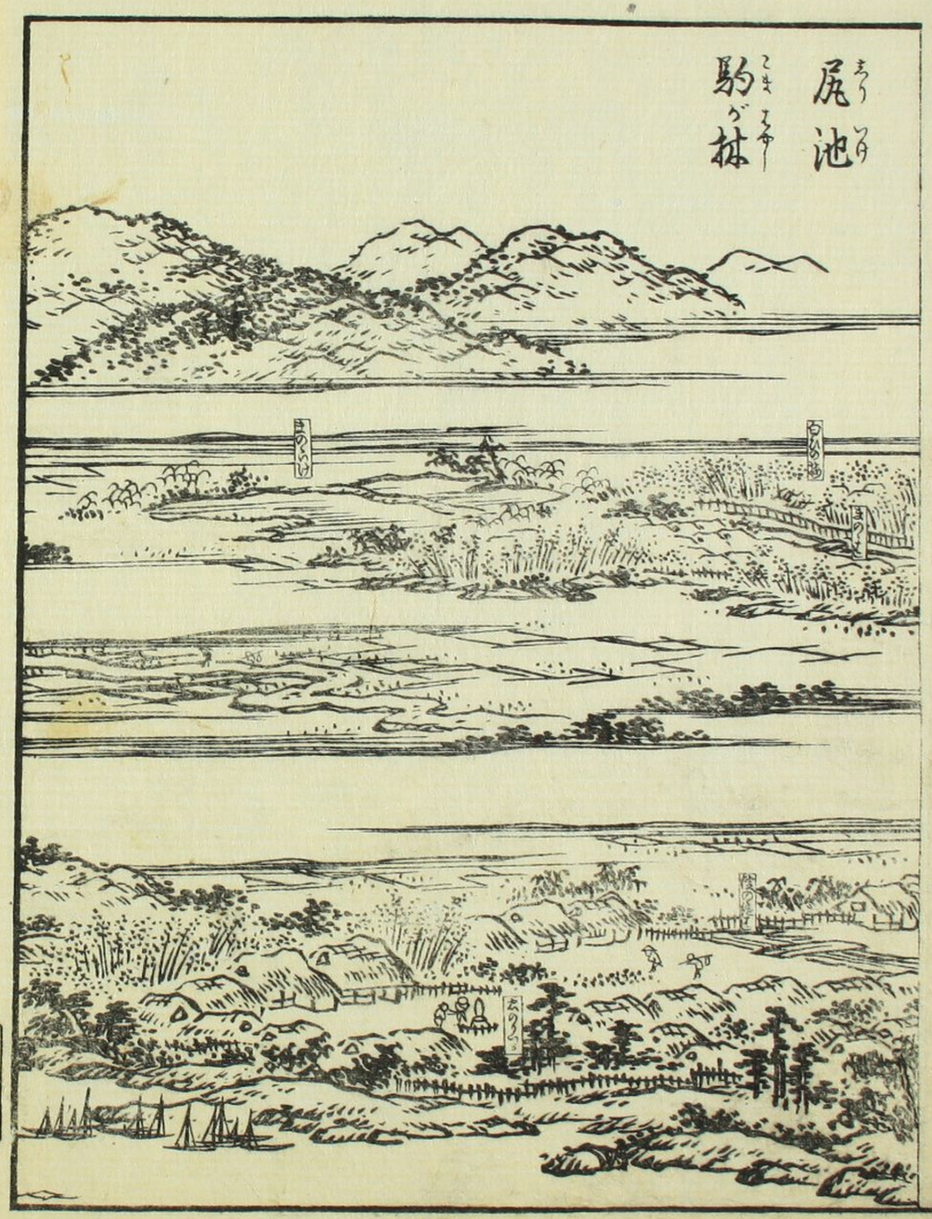
いなへの駒乃林の松 古系ふもかりうさなり 兼れ

薄摩寺忠度塚 駒林乃中にあり 仏〻忠度乃腕塚は明石にあり 腕塚町

石塔と唐さう

ともいへり 西のゆの大路なれば源広より西へ出て逃るゝもつひゆ

知章
泰孔
教賢忠孔


尻池
駒が林

異本みはるも川源より板宿をすぎるとのまべ山道ともみべし

△古牟畑　鉄砂器の栗石甲うく源広り二十又丁ゑれ桜樹の植村と云へ兵庫より爰と畑と絶て極広へ出る是と古道歟ゑ

△松風村雨二人墓　別本清盛の所に記ス

△田牟畑八幡宮　田牟畑村の入口にあり山不の生土祇ゑ倒柴八月十又日又毛牟の下十歩ヲ藪の中又古祇の祠あり也し山田牟畑と唱さ一夫婦の祠なり　鏡池　八幡宮の下まで

△田牟畑鷲尾田屋　田牟畑の村長ゑ鷲尾次郎兵衛ゑ云者あり山祖先ゑ谷合鷲の附九郎判官殿ゑ鵜飼の源信と蔡内一ゑる支族の中ゑ田地絶ゑ亡てその流

兜鍬　其附鍛冶一名近年の説ゑて兜ゑ鍬ゑ鍛冶の祖ゑ鍬形の名ゑ出ル　板ゑり下敷の裏まぐ先あり鍬ゑ鍛冶の祖ゑ系ゑて裏ゑ引合せの上ゑ霞脇板あり長さ拝寸の外ゑ毛ゑ茅ゑの中ゑり下ゑ又喉輪佩ゑ名ゑ

鞦　然毛と以て製

△義経腰本　丹生薬師那村南の入口ゑあり義経山本義ゑ陣ゑ云ふ山より名ゑ相洗の辻薬那村ゑ近ゑ単騎渡ゑ空の不又ゑ尾張の鷲鵜の跡ゑ

盗人松　池田村　白波ゑ山むらしゑ二本あり　聖霊権現社　大ゑ村ゑ御祭十六月廿日八月廿七日大ゑ板宿池田東源寺名の生土祇ゑ

桂尾山勝福寺　大ゑ村ゑ　傳説三匹あり享保二年文明十六年傳法灌頂密授名一説ゑ延徳二年長田祇社伝ゑ兎田蝶永正十三年化縁簿天正六年聖霊権現ゑ多ゑ文大永又年地ゑ縁ゑ秘ゑ花ゑ。一条流勅願ゑ不ゑて本ゑ聖観寺岡山洗楽上人ゑ芸言宗ゑ。什宗ゑ弘法大師の場拝藥師仏義の本ゑ

ゑ十六名祇の像日幡十日流弘法大師の筆両界受茶羅呉道ゑみが筆の十六羅漢観輝筆の釈迦文殊普賢唐本の大般若経本相國の寄附也

武兎守紀章の甲冑龍の玉其外数々あり

須磨　須磨浦　兵庫の津より西ゑ里ゑあり今ハ西須広東須広ゑ三村ゑ八田那那ハ田植川の内ゑ須広ハ明石郡ゑ屋ゑ今の官道ハ古道ゑ義経馬の関ゑ入ゑ

武蔵鑑抜

ゑるまちやゑ海の関屋ゑ板庇月ゑ出ゑてやまびゑるゑ　中納言師俊

月雑

はるゑ浪すゑ北月須の夜ゑめて忘ゑ雪ゑ月ゑ　参議後親隆

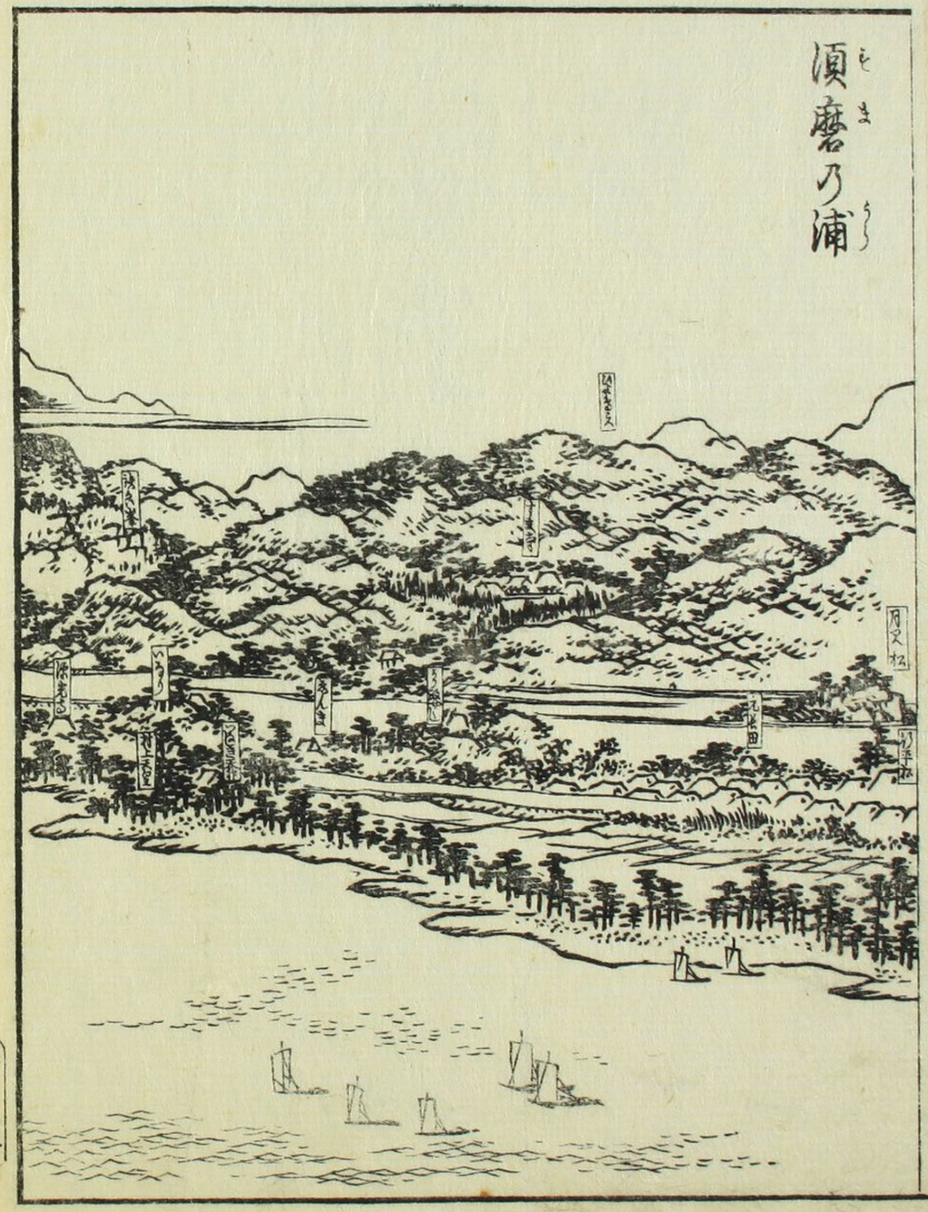
高倉院厳島御幸紀

ゑゑしの浦ゑ波ゑも何ゑ若塩ゑ出ゑる云云。是紀行の歌ゑ

○須磨明石ハ日本の美景若ゑ古歌ゑ孫ゑ月とゑ

秋ハ袖ゑ仁梅さし一度ゑ小猿人の筆紙採ゑざるゑ其若

須磨ノ浦



のりさまい源氏物語源氏の巻の文章よろるべ〜毛能り物語はし
て事実の流布はなぐしされども系地のさまをかき〜ふはたぐひ稀
ぶ所を略語と加へ色こて尚いみ〜へを参考をべ〜

源氏の巻巻巻巻
かりをまいむ〜こそ人の俗家るともみ〜れ今いて星さるれく心をごくく
なまり家ぐふまれまて世語を人ちげくひてけ〜ん俗居いて本巻
みるべ〜さう〜く都と遠さう〜んも故郷ぢ世つるるうへきと人まるくぞ
世ぐ〜こぐう多りまきく〜るさ世ちひづけ語へるるる〜きこと
いとさまくなり

○光源氏源氏の流居の多い新きこ所よも〜りされい近流〜云りのこてこのそき砲夏縁
世語ひ〜い事ず勅勘あり て移りるるあ〜源氏自氏変へるぐ氏儀ょ云遠太郎
光紅子の流居に同じ さて氏流居の配りいその宮の時御拾果く事のまぎれょ弘徽
殿のあそどのさこどき語へるる三の戸あきるより紅月夜の内侍紅月夜ょ御ろるの
ぞうれと口ときて来るうり と源氏きつぐて流〜ひ居いし語へ人氏内侍い帝の足く
げ殿うれがそれをあやまち語ひぬるる弘徽殿もまり語ひく流玄止るとは氏は浦ょ
まげを語ひ〜〜弘徽殿い氏附の帝の御母ょて内侍の妻なり
源氏ぐろ多ひその文ょ
心浦くしの秋風ょ海い世し遠々れど紅子の中納玄の関吹ゑるるひんう〜波
るく〜い実つちりふきこえてまうくなりれる拙かる不の秋なり々々中巻

おり〜流きなぐれょ海こやるく廊ょ出語へくこどき語へ中巻浦より船ぐもの
風ひの〜しまて漕紅子ょぐもぐ世かりのふぐちいきれるの浦へるとえ世くも心
細げるるふ産のつ〜孫く嘯孝うぐの者ょまぐるとおるぐの語へて御るこぐの
こぐう中巻恩場の御衣い今こうふあり 菅公左遷年表 その詩のりと図〜マ入語ひ妙御衣をば
流ょみまるるこだかたこうみ物きさ語へり云

○右の御文拾ょて源氏御位家の様をこうぐ〜ふこれより尚源氏の一巻の詞い系より考ひ人
ぐるこ者こうこうこう人鏡柴ぶた寧の九國二流と堂る大武ょ云が又ケ年任流く親房こち
遠藤帝氏紅流と流と氏通ふ小其むをふ文節こへるい源氏の御かこ〜ひもこうこ人
りれが歌ょ御遊歌ょとあり てこれ浦るるとさまぐなり

烟のいとちうくとたぐ立ろ紅れやいのまの塩ゆるうんと世がしまるい紅し
まひし海のこう柴こうふものふをぶる足ろりぐ〜くまも ふぐ門の者ょうけれ
去ぐ〜まこ〜ひこうんこる星人 ぞょ物りて雪こうあしこる紅ゑのけ〜き
も孫ょをぐ〜なぐあ語ひく中巻月ひとたうこ人くれるる紅蔵の世こう〜変い
をくまぐ今まは ゆうのよ変ふうきこもこ西へるるの月をぐ〜こ者るょぐれ
西ょ紅〜とひうぐち語ふく例のまぐろまれ妙暁の変ょみるるとなのをたるく
ふもふるる語ょ入ふる暁ふひう孫ぐふの変もたの は あう社浦いぐこひ
まこうちぐ今れぐ中巻を者ょて紅をぐ〜るふ人〜若本の塩ゆの
ゑこをこをこく産のう〜こうこうこるふ茅のの世ぐ〜出うまぐ紅ゑこと
語へこうく〜ふうり中巻 やまひのついこうる出こうる己の日々ふうん世ぐ紅こと

嫩木橋
源氏物語巻の云葉をよりて
後世さうしてはしるべし

須磨寺
今坊谷
十二ヶ所
願成寺橋
此花江南所無也一枝
輩者任天永紅葉之例伐一枝
者可剪一丁指
寄永三年二月二日
紅葉の名若木の橋の
制札なり

なる人いとをぎしく海ふなどをとるまさしき人の家西には海つゝもるるしく
て出海ふいと物ろをうるるせんじ物ろをうるるせんじ物ろをうるるせんじ物ろをうるるせんじ
りてをらんとさせ海ふ船みとくしきんうるのをくるどんと見海ふまるよ
をんらるてくゝ畏とるど御歌あり しる織る風吹出くた雨ふり海つゝふと
きをそうるうるるうるひうるうるるる

村上帝靈蹟

古人の曰むらしの天皇の時
師長の琵琶の達人まで渡唐
し玄上と名づくる絃上の名絃
を携へ此浦を来り給へを
村上天皇聖女の靈魂
なりけれと止め給宮
より獅子丸

名絃を
接げし
うば
れ
そ
天皇
より
玄上を
奪ひ

入唐を
止り
給へと
え

絃上くらく深曲
の波を流こし
給へり

記あり しが茶田氏先出雲國より事代を命神と宮を勧請ひまつり今の長田の神社を遷し奉りしと家伝なり 今の長田の社の東 西阪上の村の東 菅之舟 日百茶田氏の家載なり 清水聚問ふ 菅之舟 附山陰道記と称 紅葉すりしとなり 仙茶田氏名称を仙酒と造る郎 菅の舟と縁ひ スゲスガ 清き古酒 出雲摂津国 會之委

頼政薬師 茶田氏の西阪上寺の八日ふ あり 寺号を浄福寺とて 本尊薬師如来 本堂の傍に 近年再点ひ 茶田氏拾不也 聖徳太子の御 地長 尺丈 阪上十三仏 おい尼 修 光仏 寿山 慶の 寄附 山地 清盛 鎧 北 阪上 花 上 北の 図 ら 不 何 某 の 寄 み ょ ょ て 接 え ょ ょ て 耳 ひ ら 也 ひ ま ぜ ら 名 ら 仏 例 年 正 月 歌 寄 踊 ら ょ ま ら 阪 雑 ら ど ら 為 の 形 と て 村民ちう 神ちう 拝ち

重郷松 墓所堂の西 あり

綱敷天神 西阪上の渡 あり 菅公御 紅葉 と 考ら 為て く 綱の 縄 ょ 産 ~ 舗い 絡ひ ~ 絡ひ ら ょ 綱敷 天神 不 ら ょ 多 ~

須磨上北 上の北一面の名なり 古歌あり

上野山祥福寺 西阪上北 ょ あり 御るよう二丁ばかり 本尊聖観音 護摩堂 繁りて二王門 ょ 多る 古歌 為 ら 家

鎮守堂 馬盥額 二王門 ょ あり 十王堂 焼肉 ょ は 義経腰掛 雲

神功皇后 竹宮 什宮 ょ は 敦盛赤旗名号 保呂衣名号

敦盛幼少の 跡の和歌 敦盛画像 日 瑞 日 高 葉笛 為 家

光源氏

なまじもあさうしく
ひ物りて 為れ ると
やしいでく 所らんど
南ょ 年
うろさき
ょどといせ
ょ
さまぐ
さきけ
ょ
のまま
をやれと
そそこうと
ち く
ょづると
なまれ ょ
足 ょ

田の井畑
鏡の八ケ

八幡宮

笛　弁慶制札　若木播磨之右縁起あり略し

寺記曰　仁和二年文徳上人勅して宝殿を営び丹青彩色して林岳寺と号す

〜遂に荒刹となる今日に八百余歳なり殿后久寿のころ

源三位頼政ちなみ帰依〜殿堂を造鎮守なると雖ども世を扣て

山川色を増霊感益盛なり

名所　光源氏舊跡　源広寺の西南にあり源光寺ともいふ地名なり

〜すべて源氏物語の跡双紙にて古法のみえ〜あり〜実に源光寺なり永

山寺中建立の石塔とぞ什物に源氏物語の陣を張

芭蕉翁句碑　源光寺の門前にあり近年建碑俳士芳蘿坊ちんと建る

見まくせばなぐさむもとは

風月菴仙雲跡　源光寺境内に四庵遺址

月よりけ源広の上地の秋の風尾花の波よつくづく浪　仙雲

名所　須磨浦江　浦法源光寺の西にあり今い田圃となりて名のみ遺址

ちり須広の浦ひかるうれ尊うきみの為とそ思ふる

名所　須磨関屋　源光寺の西御影の左右に一堆の墓あり先とを浦ちり浦の

浦語源かうしあるの時参よいく夜辰ちのもとの関屋　源兼昌

名所　須磨換屋　今の焼塩屋なり西の方に数十年前迄ありしが今は絶て焼塩のみ

すま人の浦べ焼塩のうき恋とも我もとるかな

遠羅川　源広の側にあり流れ出る川　四法要ちなみ地名と云

○村上帝霊蹟　みなと川の西の川端にあり上に小祠あり

天皇のみ霊をまつるなり

一の谷　此谷長さ二丁余横二十間谷口より波打際まで六十間石余二の谷より三の谷二丁に十

間余谷口ごとに後世の地方より見た古戦場にて名まるく人〜幻体なり

平家物語

平家此所にて楠麓幸い播磨国室山備中国水島二ケ度の合戦み討

勝て其軍勢十万騎に及ひぬれとも本曽討ほろぼされてより摂津国

八島より漕出し播磨の国雅波浦一谷に籠る赤い甲冑の義

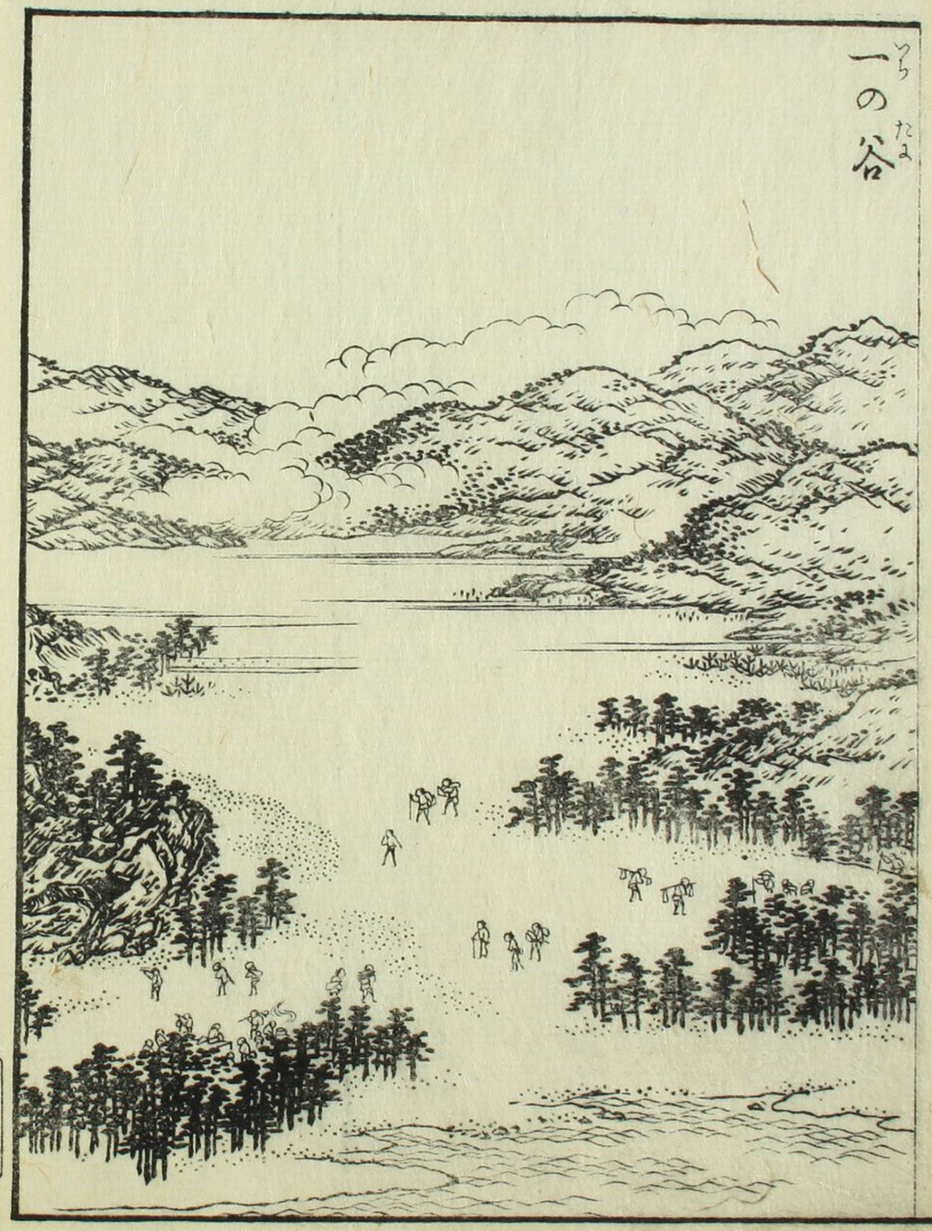
と城戸口とし西い一谷其中三里い須磨板宿福原兵庫明石の海岡

なく続きより此一谷いにせ〜奥い深山嶮〜より馬も人も通るべき様こそなり海は兵船

数万艘浦〜漕出は赤旗を其数とも見風に吹ひるがへ天に

翻りて　○坂落〜い寿永三年二月七日の曙一谷に楠麓る

平家の陣と破らんと大将義経三万余騎路誠に切なりてその

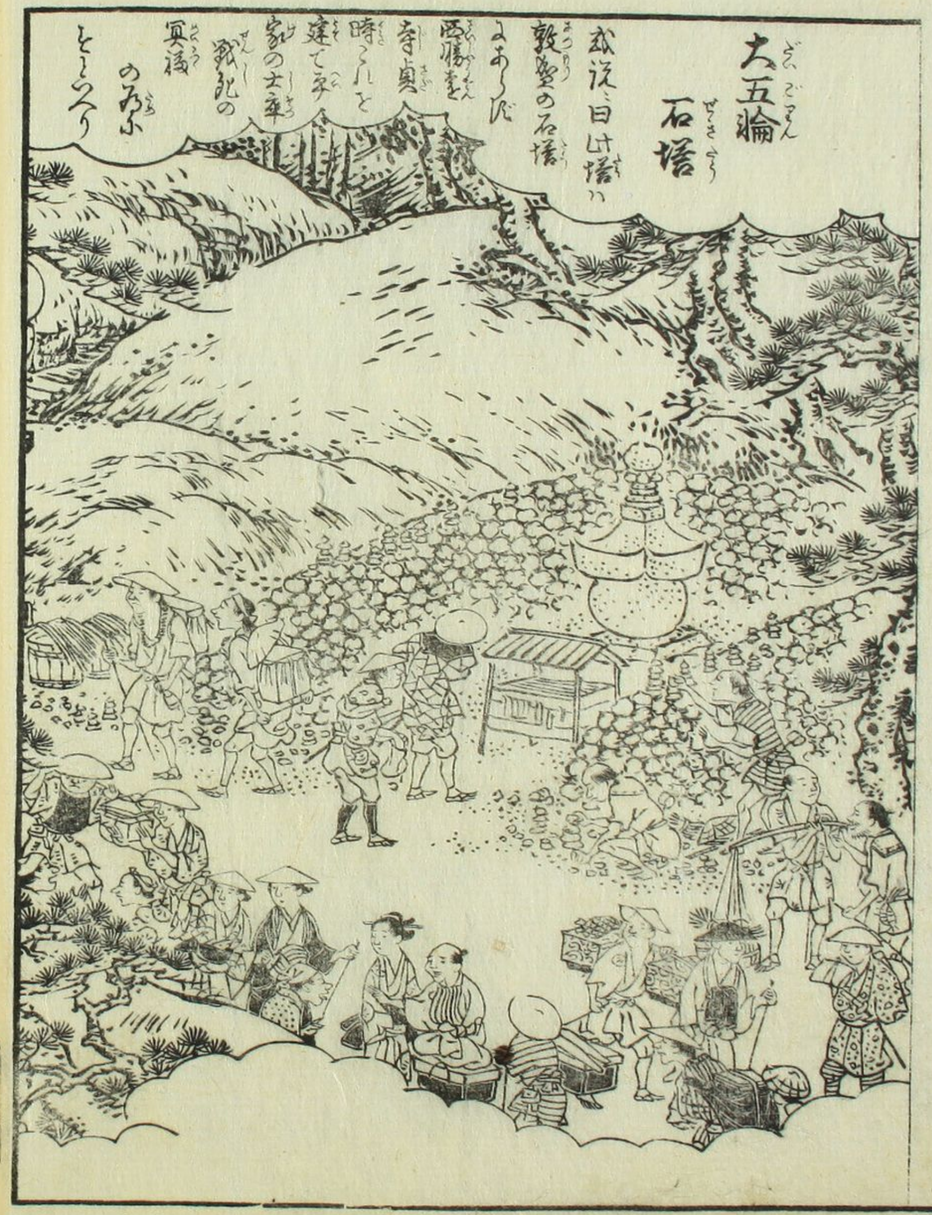

一の谷

滝名清和
源ひとつ
之丞
鵯越坂
一ノ谷
内裏流

城郭を遶み足下しいで試んとく深馬又疋鞍毫馬三疋を蔵し
み鞍毫なる馬い繰に立たざる馬い先とあり吳形て中み側を
孔名又鞍毫馬い蒸白し城中、茶目が底形の茶に月ぶるし
立ちうこをんて義経備ねる示して日抑のが低なる深馬いかくの
おし動あるものを乳ち抜忠とんくかく金し心得給ひうやと
下知とあ〜くゑ四ち三十誘斗毫念毫忠に落される二丁だうり
流と落〜て抑てくれば一段墓のでく平なる石あり吏より巖
隆推うさなりて苦し〜うり鞍裏うくてはいう小通みぶたくも月へで
上い直立下も直立ち乳も砌るも砌るし砌ぶ立て立てる低み吳
照と思い宝めるる 評曰 佐谷の掛合毫るものの大両毫み流と埋して九丈十毫ぶ〜ふは
一誘毫のあ〜うり砌とまりうみ落〜毫るもの有りませよ毫乃換み毫落さまぶ
の乳場あり〜れ〜うトい屠能を立てさるもの有るべ〜金をさまを月ろ小の一段墓
人馬ちうも落と人きゆうし拉る〜ちんじ人毫人数毫紙ちう
一誘み毫さび蔵ちう人を不あり九丈毫毫者もつ立ちるる〜
安徳天皇行宮古跡 又谷のとみ行り家し浜上りとさとの古松二十本毫あり立て不毛の地
宮家ちう拉横毫除の地ちうとそ 城塩みく〜安徳帝行宮と拉ふ今ち北に同ちう

二の谷 此谷長さ三丁横八間ある九間谷より波打際まで
に十間余三の谷小ありまぐの乃二丁余を立ちう
三の谷 此谷長さ二丁余横九間ある九乃谷口 鉢伏山 鉢を立ちうふ鉢ちうよりく名づ此峯
より波打際まで六十間余ちべに丁金の間あり 解明又重山
種懸松 一の谷の中後に 近年古松い枯て今い抽繰ちうり古松の株と切て乳板と砌て不毛氏の形揚
鉄拐峯 一の谷の 〇一説に此峯より鵯越城塩一巖名高一の名あり義経一谷と落さ一〜ちう
峯とも 巖名高一のまつぐひちうべ〜名〜せり
鵯谷平山一二の鉄 三の谷の西にあり 鵯谷平山撮るに乃ちうが鵯谷又は先陣とせんとく思の細と
又古道と絶て一の谷波打際み打出く西の木戸より寄せて一の谷の先陣と名のうりる
鵯谷み魁せらるるしぐる鵯谷の先陣は城戸を開ひ平山い繰ちうれども城戸と開きく
誠入ちう九丈一二のかけと平ひうり

大五輪石塔 俗み鞍毫の石塔〜ゑ三の谷乃る往還よあり塔い古ゑ埋立ちう
谷崩ち塔み落ちるかくれぐ〜されい古ゑいとちうみべ〜
安宮左文鞍盛い清盛の弟経理左文経毫ちうり一谷乃落城み低
て只一誘又の私と志〜一丁許撥ぶせ浮ね洗ちゑ〜給ふ不鵯谷治
即直実こしと拓き孫逸み戦ひ馬より組で落ち絶み鞍盛と元
て抑へ首と切んとして内甲を見ると十又六い斗の若と簡落化粧み


大五輪
石塔
盛況、曰、此塔い
敦盛の石塔
なあり、
西陽寺
寺奥
時、これを
建て、
家の士卒
戦死の
冥福
のあふ
をこめり

扨又、今
此塔の若き
るゝ人、下馬あるい、輦を
伏なして恭敬し、礼をなせり
是い何の故なるぞ
知らざりけり
此陣石の上い安徳帝の形
宮にてもるつちこれより
知るも是、さう若其系孔
組一門の墳墓、戦場の
不しるを、ぜりもろふ、
敦盛の塔を、刷も遺恨
なるべし
因て始く俗よ
ちたびくいさう
其俗を
附記し

換猿とゝゑ抑ひく熊谷心弱て我るとは年ちゝ孫ゝ四五と程
し助け進ゝせんゝは思へども道を落ぬ御身ゝ沒御善提とべ
共実強く訪ひゝ英の蔭ゝて御境せよと目と塞き歯と喰合
せく涙と流ゝ御首と掻落沒平家の人ゝゝ討るゝを情とて沒
きりうしき漢竹の笛と香もむ川まじき錦の袋ゝ入く禮乃
引合せゝさんとうまより後孫義心ゝて運生坊ゝはゝ乃後馬
禮笛ゝも首と丸流ゝ文徳盛に遣られる

一説ゝ熊谷傷ゝ有しゝ山附の方ゝ沒又日前い六条室町の墓ゝ有り也十三日
八条河原に蝉せゝと東福ゝ見へゝう
○又崇の小郡村ゝ石塔あり刻て曰永八年建る性氏い詳ゝ沒
附記 傳屍云武同て曰敦盛が墓御新墓ゝそ扇とゝ有りやうゝ如佛尼と
按京使資貞卿のむとゝ有る毛来の記後ゝ祐寛ゝ加持させく
称ゝ彩若光寺御祈の傳ゝ一院と建く蓮華院と号ゝ 後ゝ一旦絶滅ゝ有る勝
法院玉阿ゝ人病のゝ中ゝ沒しが有りて尼ゝ拍の扇を制ゝ祐寛ゝ加持させく
上人の病患とゝらい〳〵ゝ有れゝゝ沒て有て平癒せりゝれりゝの寺傳扇とゝ有りゝ
御教書い元櫪林寺后の剣達ゝ有りしゝ玉阿ゝ川常ゝ沒て有りゝ
三の谷ゝ西丁ゝ有り岩ハ歩ゝ有りゝ岩傷掘三所の國界ゝ其傳示の
沒ゝ福田と入三ゝの行と有迎浦國ゝ有る成極しし海上漢流の界と初信ゝ川街ゝ
を契ゝさて西い摂州塩屋村八丁ゝ沒傳国ゝ有り十又里十九丁

播磨國は山陽道八州の首とす古は飾磨郡より西を汁岡の國とつひ
加茂郡多賀郡を粉の國とつひ赤石郡加古郡印南郡なとと明石
の國とつひく三郡の國なりしを後世十二郡とすつ播磨と名て一國の
名とせしなりまとつの國号のなり

○晴岡　神功皇后霖雨晴るふ　○榛原　あひ給ひ給るんかく云

皇后御船の附樵の赤ぼに

○猿演　大己貴命の猿演の流おしし味なり武云墾ゴそ墾

猿演の流西義なるべし又彩猿樂記抽亡の社ともつり。たゝは八二の墨流なるし考るゴ國
中西の郡名に大撥墾田稲ゴの家ゴもつり尚りに年ゴ又撥磨社岡幡磨甚ゴ外さ
まゝゴ書しゴ比の子細ゴ考ゴ考るし只吉州のたるべき名なとなてつ母ゴ元云日本の古風ゴ

明石郡

梅ゴ臭　淡路ゴ臭ゴつゴる淡路して　○塩屋　梅ゴ臭ゴの西とあり若い塩と
岩のうゴゴ二株の梅あり　やきしあるんゴゴ今いゴ

薄野　塩屋の西とつゴ名ゴ
ゴゴゴ其證ゴ

てゴゴまゴ臭　石生内大臣　毛云絶ゴ

山

△奥畑佐藤氏家　塩屋村より六余丁の小ゴ山田へつゴる　源義経三草山合戦より搦ゴ山田へつゴる
山路茶屋の切あり　奥畑下畑と絶く搦ゴ氏義ゴ感ゴ力ゴ公ゴ屋せゴ
山路茶屋の切あり　奥畑村獵師彩ゴ悪ゴ三者

山

△赤石　山村の田の中ゴ得ゴるゴのゴ　合せ磯の石屑ゴ身と絶て
和合ゴ　元付合ゴまつゴゴ石ゴ

山

△妹背松　月村の森ゴあつて古大樹ゴ　ゴ附赤の家ゴと搦ゴゴつゴゴゴゴゴゴゴ
銀樹山本の方ゴ搦ゴゴ毛ゴ毛ゴ

猿員坂　布施畑村の赤の坂より
大山寺ゴゴゴ迄ゴ

△大山寺　人皇六拾代より　天台宗僧坊十二宇　洛陽志蓮院末　本尊藥
二皇中良ゴあり
師如来尺十尺代元正天皇の勅願として大職冠藤原ゴ乃草創開基ゴ
惠和尚也ゴ霊亀二年藤原ゴ乃孫宇合卿ゴ左内六ケ所ゴ薬師六躯
と造て尚寺とはじめ合せて七佛藥師の道場とゴせり

清水寺　神集寺　一山ゴ弥勝の地ゴて岩ゴ清る人絶るゴ乃ゴ武釈ひ
尚寺

猿林寺　ゴ品ゴる長林ゴ奥赤寺

をゴる若い籠堂ゴ入ゴ勤行ゴを不怠ゴ境内ゴ料理亭二軒ゴ元より
精進ゴて庵丁甚ゴ

山岳の俗ゴ　二王門の就ゴ小楼閣のゴゴ宝庫ゴ基興ゴり

△若葉滅道　二王門より二丁　俗俗ゴ云若ゴ抜ゴ例ゴ乃ゴ命ゴゴ　ゴゴゴ行社と
ゴ　ゴて実ゴ捨て身ゴゴゴ抜ゴ社ゴゴ

△力人堂五右衛門試力跡　天正の比林俗の人堂ゴ五右衛門ゴ大力の者ゴて尚ゴ力と
ゴ藥師ゴ祈願ゴ乃日其力ゴ試んゴゴゴ二王門の柱ゴいゴゴゴゴゴゴゴ

ゴ行赤ゴゴゴゴゴゴゴ

垂水神社

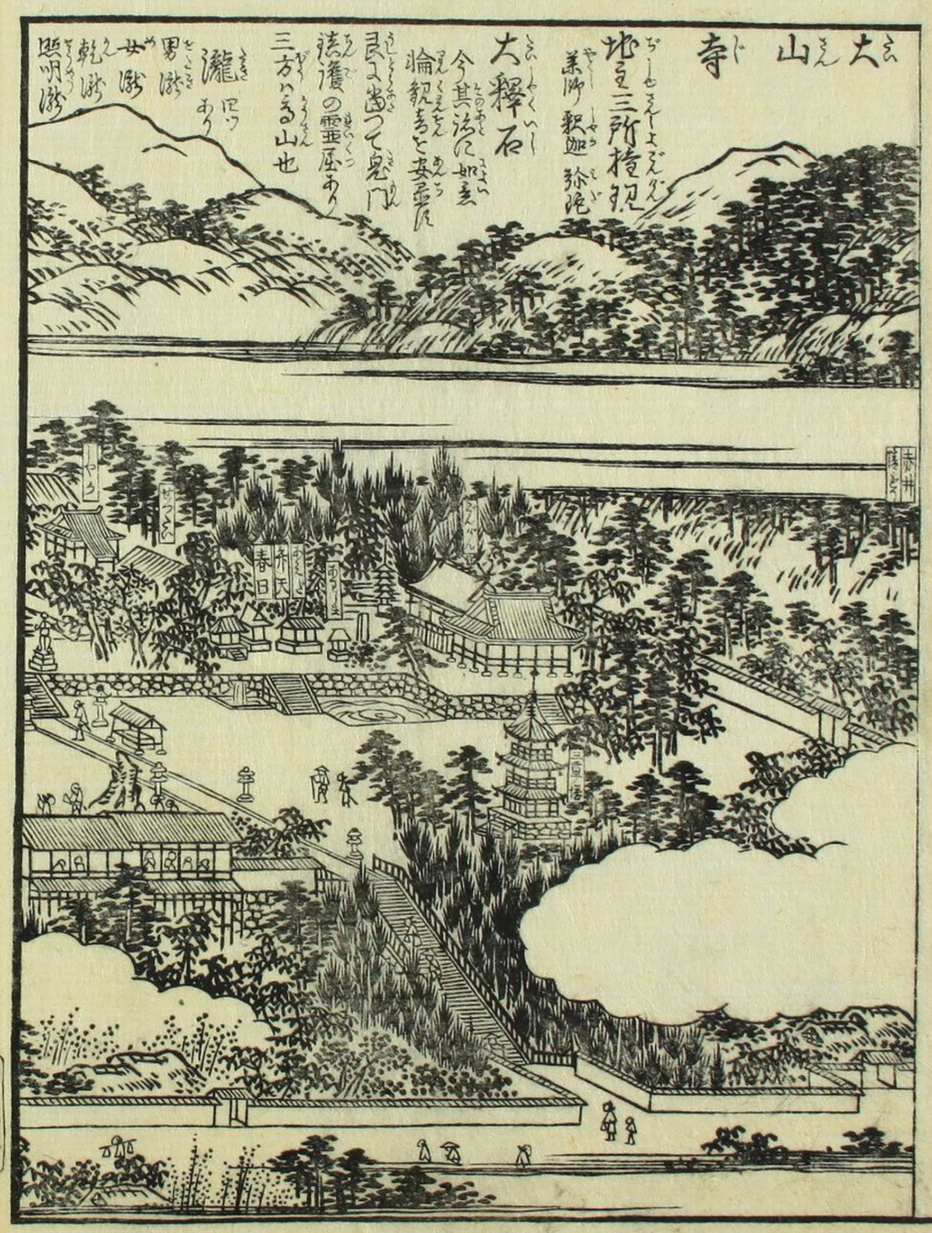
日向明神

夫本 垂水の神
をりのぼる人のみる
宮ゐ
ひとなし
ひとなし
垂水の
紫の玉垣

後拾

按ずるに神名帳に海神
と書しは是ワタスこゝろ
なり 即伊吉連表中
庚の三年之日向明神と
嘗事ある小戸橋の
國名なるべし

添忠國云より二石余の
祭料 秀吉云祈禱料
とゝて御寄附の
ありし
其山携橋よ
りて携着
猿とれて橋と


大山寺
地蔵三所権現
薬師 釈迦 弥陀
大釋石
今其法に如来
倫釈尊と妄言
良久尚つて鬼門
法護の霊屋あり
三方いる山也
瀧
男滝
女滝
乾滝
照明滝
春日
春氏
大日堂

山上
観音
白河法皇御幸
後宮多院御幸
大塔宮御宿
されば御寄附の
佛像経典
調度数々
御来
大日堂
摩耶谷
温泉 二里半 西南
大磯道の
南入湯
又美湯谷
南入湯
いなり社

垂水神社　西たるみとあり武内日向大明神と称す　神名帳海神神社　三社　例祭八月十又日

千坊谷龍華山薄法輪寺蹟　東たるみ岩のとあり大伽藍坊舎数百あり　今其廢堀とみ坊谷とよびあり堀上に宝篋塔あり俗称に云建武の比紙屋川の高

遊女塚　西たるみ御る人あるの茅江口の遊女ども其実を考へ人竹村らの茅江口の遊女ども云一説に曰大坂の遊女下関へ移る比海に溺死せし塚と称す云

千壺　遊女塚より一丁半西にあり　一堆の丘にありて周回三丈ばかり　陶壺数百ばかり車輪のごとく埋る　蓋も共に埋る　諸国に日名色皆水の多く脱し出る国姫路の逸国名寺の東に霞の月ふるさと周回多壺ありて車輪のごとし又月国加西郡也　とくに百姓の掘る物千壺ありて車輪のごとし　家良より西三十丁許に神功皇后の渡りとて摂宮と荒ちまれ百ばかり人怨をなして敵を近づけず昭二年むかへ

壺ばかりまと埋り数あり　苟の中方に地色あるべし　○日本紀垂仁天皇三十二年殉死を禁じて出雲国より土部百人を喚び埴を以て人馬及び種々の形を造り生る人を易て陵墓に樹る後世の法とす依て此土物を号て埴輪と云

出雲国風土記に曰出雲郡の部外に人形川あり　人形川とは数多の偶人の形に似物あり　其大さ人のごとし　其後久留米城下の部外に人形川あり　其振神唐人のごとし　其外掘出る器物多し　其例多し　今残るもの石人石室の宝殿の事にも記す

○一説に此山陵を造る人は仲哀帝の別腹母熊王と詔て造る　今日本紀神功皇后紀に三韓征伐の後帝と筑紫に崩ましける　悪熊王を嘗せんがため王の陵と造ると偽て播磨に出て山陵を明石に造る小船を編て明石の岸より浦の岸へ宜しく甚多の石を運ぶ其人毎に奴隷を与へ宜后の選ると結てり

鳥崎　掘る此辺よりの味うり一説に曰此山陵と号て帝選幸の府に紙壺を極て敷焼に仲哀帝の陵と称す　陵の西より幕なの浦の西まで墨あり後を辛紀二十又巻に掘る明石浜広鳥崎と

舞子濱　たるとの西なる山田村との間　東西十五六丁南北五六丁の松林なり　此地古歌名所多し　名所記に

さすらへの名高きかの天の原　雲の波立つ　雲の色松の翠　雪の物に異なる

なれの砂い雪より白く数々樹の松の高低なく揃と名づけて

枝乾屈曲なるもの多し　足利尊氏の

いくさまるる砂尾上の松の　一度して猶松林の堂に

岩家　茅葺の漁家なり　二三丁ゆのなりつづき　間口一間半　奥行二間余高さ一間

十丁ゆの名奥の四郎に至る　其数三十六戸

計て大小五百戸　大石を以て造る　屋根は二間余　棟の上に一枚紙

く入れり　先皆いつへの墓に去る　埋立たる物雨露にさらされ　敬慕

もの也　大石の人家なるべし　流れ風雨べし　不審多し

山田　茅葺大発谷の　平家物語高倉上皇厳島御幸還御の記　文治の日天晴

なり村なり

海上は長閑　長閑の波　平家の御船　とをしめ　せて人の船も皆漕出る雲

の波烟の浪とかけ渡ぎ　浦ひく　其白い　播磨国山田の浦　を出せ給へ云々

吉祥山多聞寺　弾正山田村より十余丁ゆ多聞村なり　天台宗開基慈覚大師貞観年中の創也

本尊毘沙門天　○尚寺及び付近郡御朱印の伽藍地は表のとおり　慈覚大師

法のあり　同の比より　毘沙門天　寺領の百姓を級の尚る者数十人

茅葺十二間　東より清進　一山の僧侶堂の集　仏殿

方丈　とりげ　漢絵　の中刻　小の古敬法　悉と　十

巳より　廿斗　の男　十人　飛　出　具　紙　の序　急　合せ

様　合せて　意　物　れ　内陣　大　の大　人　出　れ

見　小　鬼　ろ　迦　大　の面　三尺斗　甚　物　体

べて　鬼　と　に　帯　滅　大　拾　杖　小　鬼

退　て　張　出　茅　て　堂　踊　は　鬼　の

人　小　縅　波　あげ　持　曳　朝　彩　鬼　賀

大発谷　釋　れ明石の歌　大発谷　王　谷　倉

ひく　朝　廷　の　正　税　と　発　る　倉　若　発　の　色　不　や　ろ　ん

風雅集　旅　世の中さい〳〵なるこの浦　とりて大発谷　ふ

今むかふかたはたかしの浦なれば　晴　我　ひ　る　茅大納言宮氏

拾遺愚草　旅まくらいくしほ　義のさめぬ　ん　押　ひ　れ　む　や　く　る　定家

第五濱

武蔵第一の海湾なり
撰ばれり後は小山
づき其間は隠れ
と云う海湾南方
の風ふるふ吹こし
て本ぶの宜と云
後の山北麓と云き
に生育
の理と得るなり

源貞世 道ゆきぶり
明石の浦い沖は遠き濱
のなりけりめ見え

うるうちしく雪紙おきする
ゆうるる人は縄の松り
とうもうくく
濱風う
うびき
うれしる枝は
白菊茅
おぐりて
ひうく
うとうう

桑名の浜より
渡海船を
乗む

多門寺

傳法輪寺

八幡宮　大菱谷の赤濁より　倍云弧智菱形の霊と称り　弓矢神と
号けしとつ月のひとりう八幡宮と　称し　出雲

稲荷神祠　大菱の赤神たり　印紋
角角、三の字　三巻三巻月　祭神三座　大山祇命　面足命　惶根命

社記云人皇三十四代推古天皇の御時伊豫国弧智菱形南蛮人ところ小弧に乗り時
中国の三島明神といのりて功あり　小弧る側赤九月九日神
輿一基弗　神宮なるとやうもする又牛あり　もつひて毎のこの面に向粉をふりかけ
顔に大の字とぎき夷敵の尉塊たり　○稲荷　もも稲妻　もも稲穂　もも
法華経牛の口元又夷敵の尉塊たり　○稲荷　もも稲妻　もも稲穂　もも
恋云稲荷稲毒　もも　もも　得ぐし　もも稲集　やあるべき神集の人皇風古花九月
往古被祝稲とあり　もあるもあるべ　大倉の地名に合せ考へ

休天神祠　稲荷の　延喜元年正月　宰権帥に任せらるるに　筑紫に迎せ
西の丘

らるる所此地を歴給ふ　時　弾長迎をうて其事を嘆く　神其志を
感ぜ　橋の傍の石に　鞋　一休息せ　詩句を給ふ

驛長無驚時変改　一栄一落是春秋

既に　て宰府に　ゆき給ふ　明年二月廿又日宰府に　艶じ　弾長長暴
に　終り　て　かの石に　以て　神に　社を建て　芝を　ある　所に　休り　天神　云云

大鏡第二云
菅相丞　ひの外に　つし　へり給ふ　舟　播磨の明石の　弾に　ぎり

法ひろふむまやの長いしく押人数々きと所遠じて作り法へる云云
源氏法ヶ巻ヶ源氏明石へ母君法をとぐむる人ありて
其ヶ名所の言葉ふり

むまやの押さよ白詩とゝもとる人もみろ紙まして押ちとまりぬるく
ゐん物ろえゝり云云　先皆菩ヶ雲亭白鶴のすとつり尚明石の帝の嶽所廟の嶽平ゝ
帝ゝ所ゝり帝嶽集に見人ゝり多ヶ墨に

忠度墓　大蔵谷の西の札場人丸の石碑
右ヶ丸人ヶにあり忠度所ゝ

石碑大小二つあり小碑前の塚を

源忠綱卿の和歌ゝり

今ゝゝのり世ゝしヶ残る名のこけよきざめる名ゝて残せね

腕塚　忠度墓三丁ヶ小浦土所の墓園ヶあり
其者い遠鏡と押さゝ法に松とゝ人ゝゝを大碑い帝嶽帝文帝ゝ帝ゝ帝嶽い明石
備長深田ヶ右浦門諱邦美ゝゝゝ文い文集ヶ濃ゝゝゝ墨に
右ヶ丸の嶽と埋ゝ所ゝゝゝ腕塚所ゝゝ

両馬川　忠度塚より人丸ヶの
ゝヶある細流ヶ

抑本人麻呂社　忠度塚ゝ三丁ヶ小東坂ゝ入る西の名居
の傍ゝ嶽の前ゝゝ人清水あり先ゝ湯ゝ塚ゝ紀い宝殿寺程度丸云の手ゝ

本傍長七寸神ゝ勅造の年月い詳ゝ所社ゝゝ小移をい元和の比

明石の嶽嶽ゝ附ゝり四い今の嶽内の地ヶ行て軍記人丸塚の戦ひ抓

と記せり尚今嶽中ヶ小祠あり本朝文粋敷先人麻呂の濃ヶ云ヶ

姓い抓本名い人麻呂上古の歌人ゝ持統文武の朝ヶ仕へて彩田高市の
王ヶ遇ひゝ云歌道の聖神ゝ崇めてかゝゝも代ゝ帝王の奉幣ヶ
御制ゝ編る享保年中正一位の贈号ゝ賜ひ皆歌ゝの徳ヶありて称ヶ
ゝ人丸の物い事法に委ゝ国ゝ嶽を松平信之ゝ名ヶ年雅章卿弘文院林ヶ
実ヶ書ひ名ヶ宮の人丸あり記
士ヶ見ゝ記をゝゝしむ社記あり播磨国華菴瑠宜書して奥ヶ旅ヶの

名松平信之の士ヶ十九人ヶ尚一人所人二人ゝ記せり

○又ゝのゝゝの歌い古今集羇旅の部ヶみゝく即人丸石見国へやらゝ
附ゝどふ江浦より船を出せり附の歌人是玄妙の境ゝゝく古人皆先ゝ
歌ゝ人ひ歌ヶ宴ヶ社を建ゝり楓ヶ江歌の碑ゝゝゝ
うさまゝくヶ山門ゝしゝゝていまゝ忘ゝゝゝひさる小雅波り偏葬仲餘
材抓ヶ解ゝ不其遺ひしゝゝゝ感ひ因てゝゝヶ其大槩
をゝゝる

ほのゝくとあゝ江浦のゝきゝて鳴くを彩船をゝそ出りゝ

大倉谷

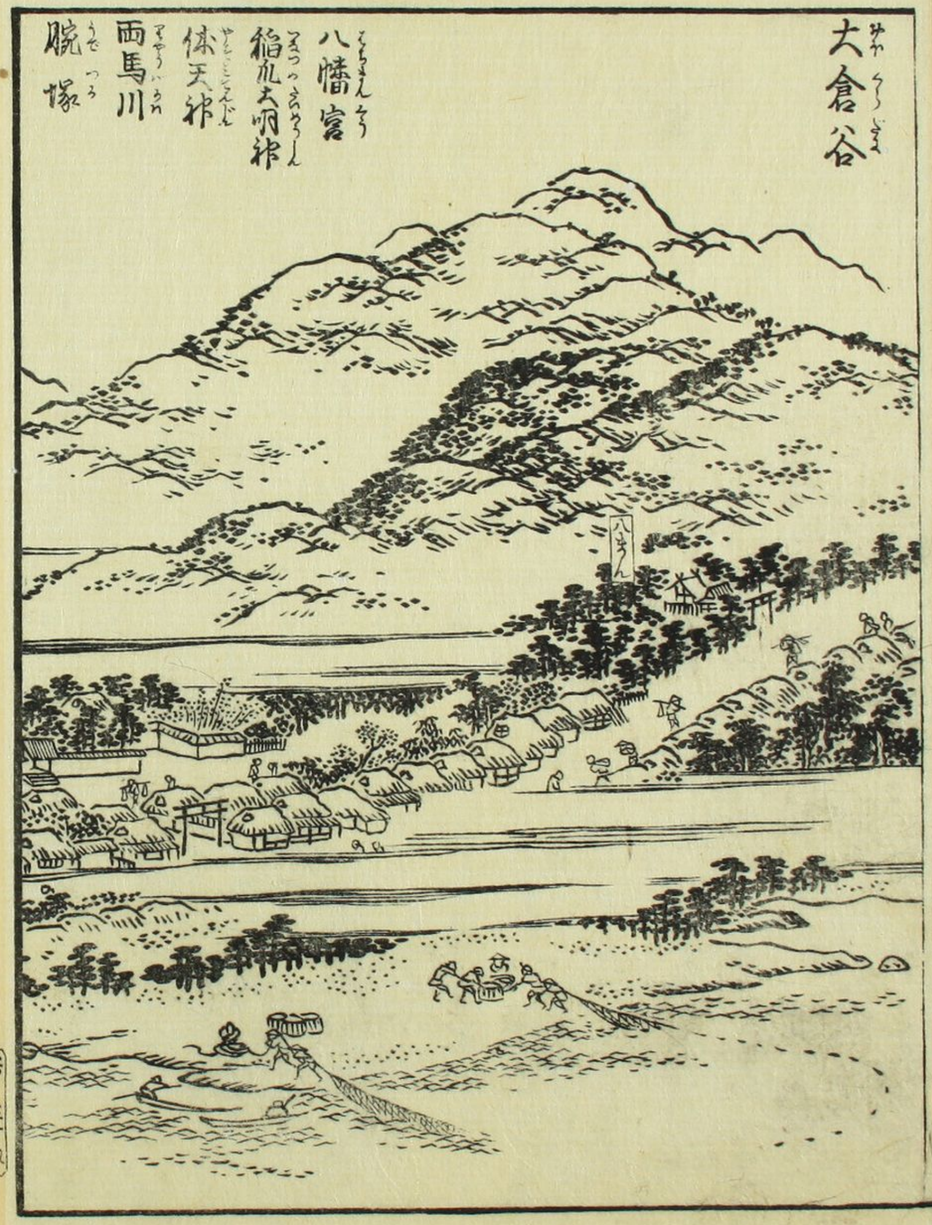
八幡宮

稲荷大明神

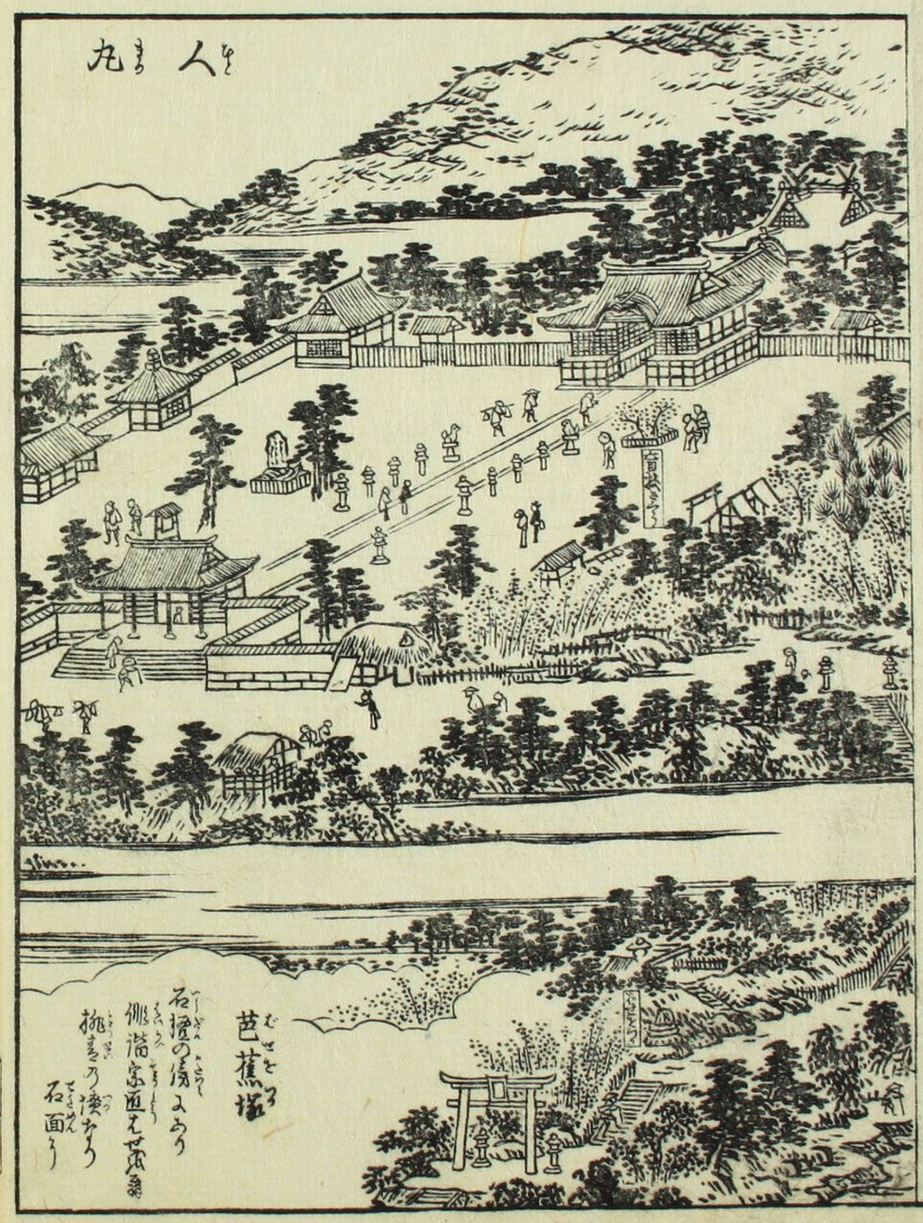
体天神

西馬川

脇塚



山深き其の末綱とる
ものをイカナコとゝひく
えゝ〳〵えゝ附い鍋に水を
加へ蓼佛湯に
池をめぐりて長堤の
そのまゝ蓼に入く
池の池
其奥〳〵
兵庫の郡に
つゝ〳〵
カニスコ
これ


人丸
芭蕉塚

月照寺
順石後泊

風体抄云柿本人丸の歌上古中古末代までもおよぶべき歌の心ばえ歌のすがたのいとをかしく哀にやさしくなむ侍と云々歌の姿の無ざるべきなり歌心なりとそれを詠ずるにはやはらかにうつり変滑曰是ことの後いよいよ哀なるべきなり

万葉集巻七春雜歌

あらたまのいはれいかいそれ附て流るゝ滝をみるにしぬべし

ゆこさんと波すゞゆゝしきあまを妻をまきてしきぬ

此二首の歌を引て此歌を評し給へるゝ人丸の歌なりそよりてはあらてあまをまきてしぬるあまの人丸の歌なりそれ附て流るゝ滝をみるにしぬべしとあるは人丸の上の句なれば流れ滝の二句なるべし船をゝしてゆこさんと人丸の詠なるべし先波の音ゆゝしきあまを妻と詠ずるとあるは船をゝしてゆこさんと人丸の船をゝしてゆこさんと

寛文年中坂之松平日向守信之侯俳と連らる其文い抹道春これを撰書し其序甚長文なれば畧―ぬ　銘曰

物本之種　和歌之家　千歳摸範　六義英華
山川艸木　雪月雲霞　詑物而感　軍思無邪
言言之葉　字字之花　聯枝以茂　鋪玉無瑕
敷島道通　詞源水縣　涌然而出　詰乎無涯
几鳴高岡　馬生渥賒　絶類而優　有誰而加
赤石浦曙　白霧丹遮　廟祠認跡　冠蓋成衙

石州高角山之人麻呂の祠ろう　俳諧い佛國寺百拙和尚の撰へ　大和名不因舎之ろうりに　享保八年人丸幸弦考之見人うう　又大和國添上郡治道森人丸の墳塚あり　俳諧い大與後仰先と撰に

九一之年正月之吉田侍従兼尤清門侯兼雄朝臣奉幣使うて正一位と贈らる宣命位記石州高角祠へ綸る甚附明石の祠より正一位と準称ひべき勅命あり禁裏仙洞の両御所より石播両社法楽の御制あり　里諺曰当社明神い安倉を護う史実と避るの霊験あるの義と云

月照寺　当社の別当職うり本るる安阿弥の祖開基い安堂和尚なり　釈迦如来

赤羽神社　人丸社のゆえあり古弦　赤羽村延喜式神名帳　赤羽い明珠の美称へ所祭恐くい羽明玉

なるべし　天日槍播磨国之泊る其持来る物の中之羽白珠赤石珠

みへの瓮仁記り見西義郡名もうくり出る孔　○如見社年松寺

明石浦　郡中海道の要路なり　明石潟　潟い海道の磯　明石海　明石灘　明石濱

明石迫門　迫門い渡路とのるせいき不見　つうり迫き赤うい十八丁也　明石泊　明石里　明石驛

見まさせば赤石の浦ゆさけるる史のかゆえ出ぬる嫁うう　門部王

拾遺

夜ふくるとゆひしの浦の松原い波とそのくまるとみるう　源憲

後撰選

ひうり潟あまれ苫屋の烟ゆも志びしまるへうり秋の夜の月　明徳院

家集

ひいるくてあうりの海の秋風ゆ　中務

家集

とり出のひしの灘ゆ入日ゆ清まるうん氣のあうう　人丸

万載

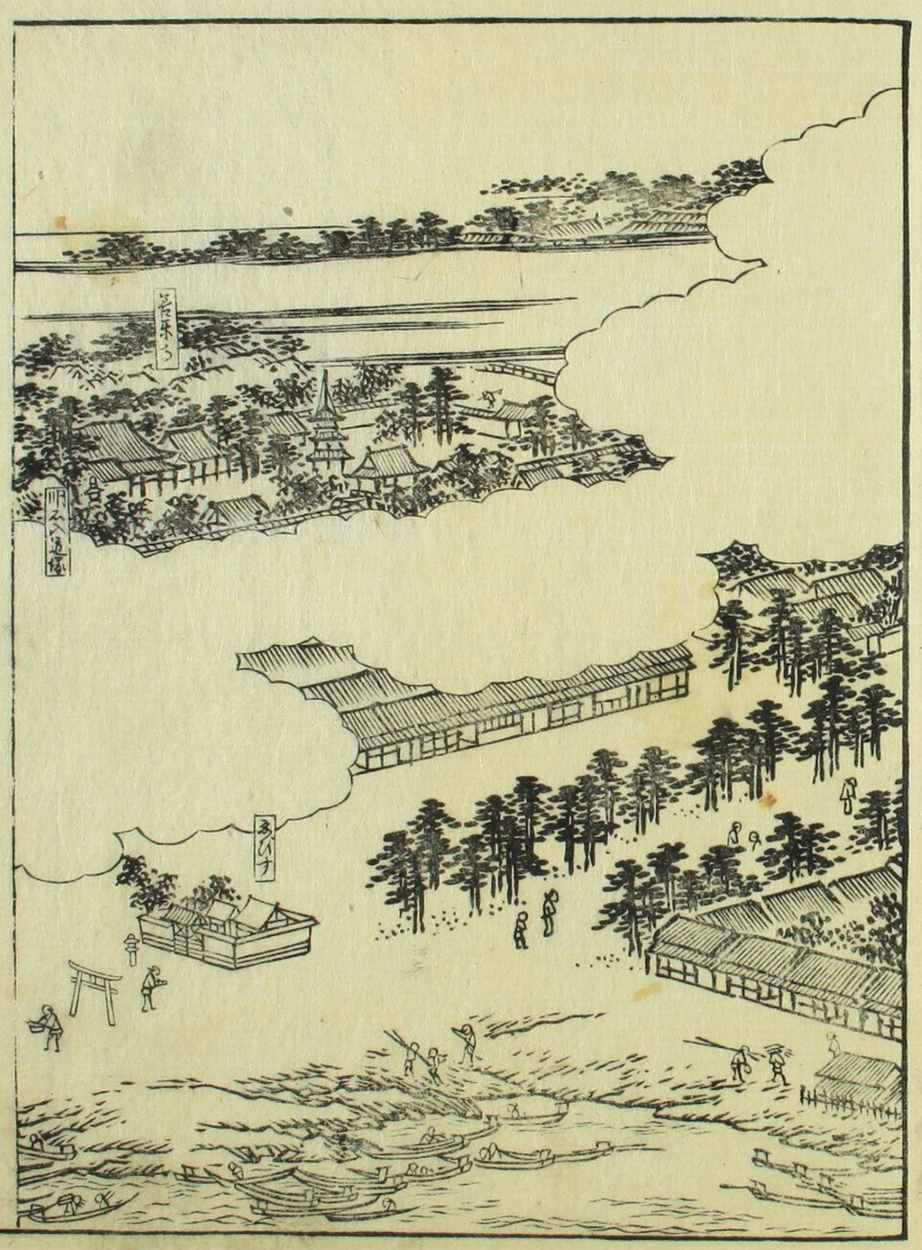
夜をこめ明石のせとに漕出れい遥ゆ海くるさとーうの夢　後恵法師

新古

二夢と夢をは出ーー河ゆるいく夜ひうーみとまりうりうも　云通

昔見し浦の面ゆ月ゆ見ゆ　古今多ー

明石鎮城　元和の頃小笠原右近左衛門尉ゆ築く人丸の祠ゆ移す　赤羽に門より西根路に門ゆ至りて


明石人丸遺跡

明石窟社
六月十五日紅九艘
を浦湯の器やう
まとしへ紅毎ゑ盛
ぎつまつくとも之減
もう色めさましき
まざるの上水
もとの浦湯ゑ
まーませ
ーー
ここぞ
尚侍記ゑ
ゑ紅ゑ〜

九丁余小い郭門より連り南い海迄市店ある凡三十六丁所名毛之産
此地より免許の地之此餘い両門の外東西新所南い海辺の漁者町新
濱新濱名之郡中い十六荘より村邑数く百廿三之城下の寺院
数い大抵二十一箇寺神社大小大抵十社産物い鰊米粳 伊川谷上こに
棉布 竹子笠藁席穂蓼 大発谷あり 神谷穂を出ず 焙烙具 鉢壺 編 今い此ハ倉
絹 天正九年十二月厳著突後くて秀吉之播州紀の対 信長公へ献上のうちよりしの干鯛之箇こ見へ
幸矣の ぶたり 飯鮒 あひい糟漬 鯔 成を 陸引 鰯 凡 俚言白 ごんでん 揚梅実 城下干菓子
又茶物之制とる物又尼平蕨 神馬藻 萩 浦之名 海苔花
槿寺 今い光明寺と云ふ新寺宮の寺とて京に門の傳之
光源氏の故郷之よりなく此名あり其茶漬うこに 御茶屋 城川の東南に茶屋格
尚城を経過の地なり のむらのうち其絶系
月山 先近年此不の名ところうて川に西之此ら此波戸湾こ凡明石の浦の系之ハ
此不より見る此外一こに赤に又 紀伊新地金剛山生弱い手之資人西に国小海南之浦浦
つきくく大和徳之の之絶しまくくよりこ海之波戸ろ松尾湾へる
絶又十八丁ありて 地蔵の咽喉なり 旅人毒きくるべくく
山岩屋神社 月山の西 延喜式神名帳之云 弥宝之 神社祭神六座 伊特諸伊
特冊 大日霊 月湊 姫之 素盞嗚 創案九月十三日 名称稜六月十八日

御舟祭三月十三日 御湯正月八日城之より献之
○舞況之寿永の乱之比神宝い奏者和坂の合戦之奏之今又絶紀あり
牛頭天王 岩屋の社郭外之あり 神社強盗いとく廃峯武之神ろ明石の浦之奏
六歳の因なり 法ありて廃峯之 ぶるこ云義毛之数年と絶て平安城東方結護のる
抵園荒所勅詰あり しもてを社こ成こ
竜王山長林寺 岩屋の社の 本尊薬師如来 後京宇合明石郡之 元正帝の
うしより 建る七佛薬師の因之
勅願寺之剣ふ くく宮恵和尚開基也 天台宗 大山寺末
若樂寺 号法宝山西の坂門 開基法道仙人本尊地蔵菩薩 東麓山末天台
より南へ三丁ありり 地蔵い今寺中 実相院ありり 保元元年平清盛播磨守より 宗之恵心の他乃
ちく寺仏五百貫を寄附を養和二年寺僧名清盛が ある之又論乃
石塔と建て供養に今之抑ひく不絶寺門の内之明石入乃の 解之
附記 源氏物語明石養大意
播磨の新乃守そなりし明石入乃ちく人元い大臣の家筋ふく 罪進之家
乃元乃と世のひら希まて其志と捨くく入乃しなれども 明石乃 紀
乃之濱のうち図べのたちなどくたりくべて 絶りり又 毛之ひとりの女之

明石のとうとうへ入るいさまう書ひて一つの祝ひとなる吉の祥ようけて我とこそ、かく
世の栄いさちうしもけむしをあいるる紀人よ生きうんり〜祝ひうるひ武いまま
さえぐらねどせば海よ永とうげと遠江してありつるふ打ふし源氏源たる
さもう〜まして雷神びさしくひらち紀雨風をげしきの日ばるありて絵と
雷鼎よ神ちうまえ源氏の御文帝の霊験よ月久移ひけ源たをとやく
うちされまくの若げあり明石にも絵吉の祥の若るどにようて源たへ源氏を
逆ひの船よそひて紙屋の若るど絵うゆせば源氏と義よそひ合されて親しき
者に入人つまく〜入るのうちへ入せ絵ふムのつうよいうしき堂と立て三昧と
紛ひけ世のまうけよい秋の田のくとあり神さち稲倉をく立て去あんめうう
親けうるたう源よ神ぢてむをちぐもい園部のやるよ移り居うう源氏い祝ようう
御車よを入せ絵ひぬもば入るの方ふ月日の光りとなる心ちよ仕りる有の
さまをばさ〜ひもいうびつうりはしうる心ぢ人ゆえさく石紙ゑどのみさまえも云
まぬ入口の水ゑど絵師いかきのぶぶほどと月色入るも琵琶ひきうど心あんきふ
めでうもと絵よ女と等せ等婦う絵へ〜ぶせても心よ物をうやむうるやうやいう
よと風入もうく いうしく〜 神りうんう絵のうぐややよいうふまぐくぬ
人り宮うるやまん 此後日いうて八月十三日よ園べのむをうりうち〜馬よ
くまつうたまひてくうふうきさまうのいるぐたさくちぎ〜せたまひぬ
此のち七月廿日あまり帰洛乃宣下ありるふいうしのとい六月ばより

さぞかし故郷へ忘れい帰京の後むく〻ん〻ぐさを語りて
あるしゝるとさうみたのろをくめるひとゝ成つゝせぬ孫ちやかけてまのづん源氏あゝ
までの物ごゝろのちぐるゆの孫のちゝ〻ばかりにかゝ〻ざるゝん入るいつゝゝまるゝ〻ゝ
ゝ孫のそうぞゝ古臣ゝう源氏も世界ゝ訓ゝる物ゝゝ物ゝゝにしたまゝ云

無量光寺　月南山と号し法華宗の南にあり本尊阿弥陀佛智恵観音光源氏月を
ゝうの堤ゝゝゝ月見の松みゝうゝひて一様の松なゝう

海士男扶孫塚　月見の松みゝうゝひて一様の松なゝう
光むゝの塚のあゝるゝゝ

惣門　塚下西の口脇惣門ゝゝゝ門内南の小
みゝ名樂寺海士塚の小い松本村

皇王村　明石川より西の郷ゝ長さ町ゝ西新町ゝの八王ゝ接続い村の小森の中ゝう
山皇ゝ村ゝゝゝ日本紀延喜天皇の紀ゝ合せゝゝゝ長ゝ甚田畑ゝ云

明石川　摂内の外ゝあゝ川中二丁余ゝ流ゝゝ
源い三木郡ゝ出てゝゝ長川二筋のゝあゝ

人皇十八代反正中天皇の御孫市辺押磐皇子の伝　計弘計の御兄弟
みゝ市辺皇ゝ雄略帝ゝ討ゝ逃ひしゝより伝計弘計兄弟を
潜ひゝゝゝ及ぶゝを恐ゝ逃ひ苦ゝ丹波余村郡ゝ逃れゝゝ
日下部連ゝゝ若い遂ゝ播磨国編ゝの石室ゝ入ゝ編ゝ記しゝゝ
伝計弘計ゝ計連ゝ物傷ゝゝゝ逃ざれい明石郡ゝ来て編ゝ乃屯
倉ゝ牛飼ゝゝゝ逃ゝゝ縁の素日部の小楯ゝゝ若郡懸と

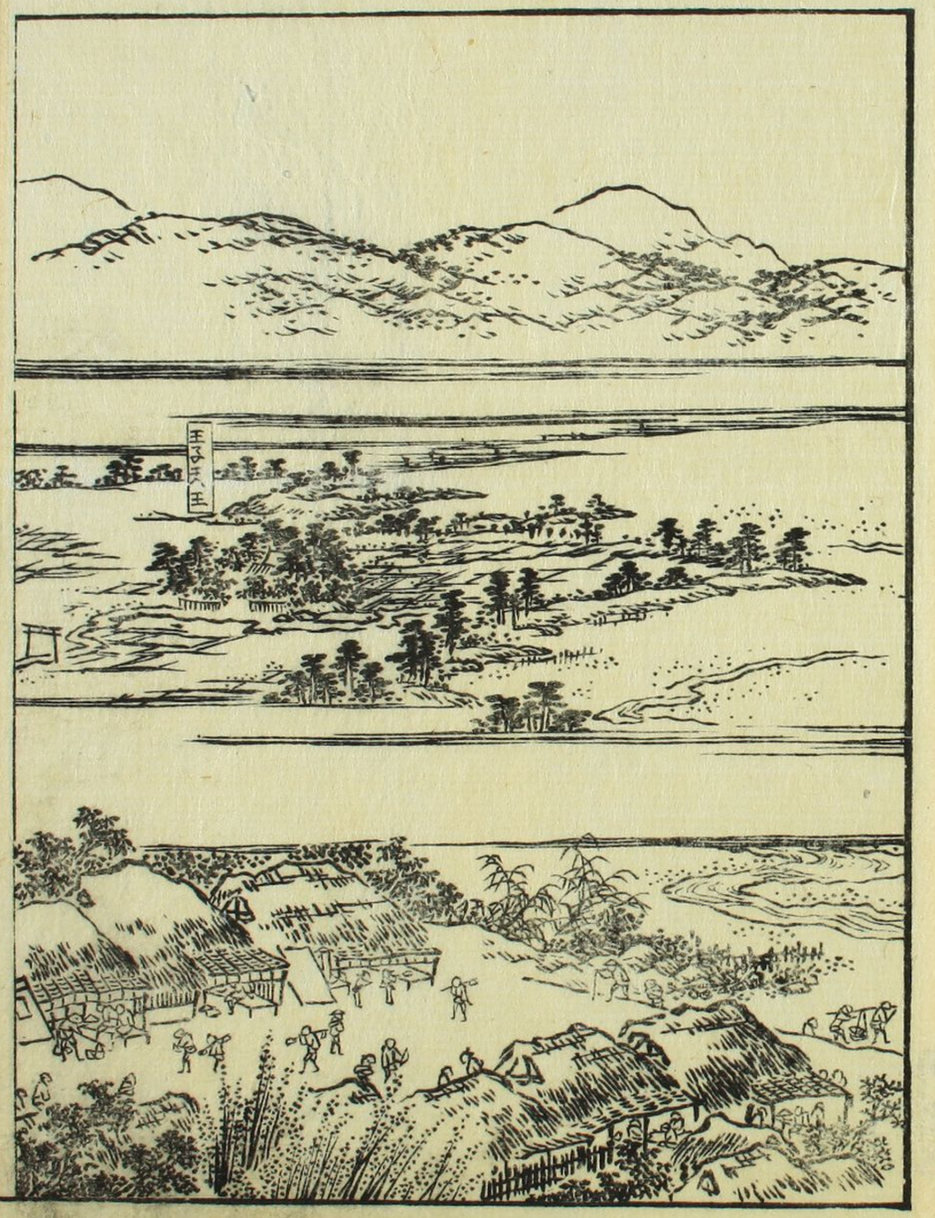
巡幸して祖母穀の坊ゝ乃編ゝゝ新嘗の饗酒の時御兄弟ゝ狂惚
を乗しめゝう疾源く酒酬ゝゝく翠を掬ゝて皇ゝゝゝ御
兄弟ゝゝ祭ゝゝむ益嘆ゝゝ小辞ゝゝゝ逃ひ弘計衣帯ゝ懸室ゝ乃
ゝを泥ひゝて弟逃ゝ其歌ゝ曰

○出雲い稲葉の雲ゝゝゝゝ新墾の十掬の稲の穂波蹴ゝゝ譲ゝ酒
英雄叙載中異名　○石上振の神温古代東蝦帝遠の宮ゝ天下の美国美
押盤ゝゝ乃御裏乃僕ゝゝ

ゝを逃て小楯大ゝ弱ゝき席ゝ離ゝく再拜し即郡民ゝ宮ゝ造
して安座せゝむ即ゝ状ゝ以て清寧天皇ゝ奏聞ゝゝい大ゝ歓ゝせ
逃ひて遠ゝ明石ゝ逃ゝ物ゝ以てゝゝ張ゝ反家天皇ゝゝい弘計
王ゝて仁賢天皇ゝゝい伝計王乃ゝ也伝計ゝゝ百姓の憂苦と
紛ゝく仁恵徳政の帝ゝてゝゝ此をゝて今ゝ村の名ゝ皇ゝゝ唱ゝ

祝上塚跡　里俗ゝ不ゝ　昔ゝ山庵遊ゝ友徒居ゝ後鳥羽ゝ賀ゝ右衛門居ゝ天正
の初ゝい三本長治の家老山城守居ゝ秀吉三木表の附戦記ゝゝ
甲斐守長真ゝ守ゝしむ慶長年中池田輝政家老出羽守居ゝ元和中

海士男挟儀
元恭天皇十四年
天皇浦潟を特し給ふに
神の巻
まうて海
産二十羽
の御きさへ
て大勉の大
海士男
狭儀い
浦ひく
即記に
其亀を
あられと
樂し
て
蓑をつくりて
雪く夢を今
の紙に
武曰謡曲海人の猟えの色と
元禄ひ〜の人今の世
あるひと元の男海士ひく
女を用ひ〜ひよく蓑を保門
しりうる所の後世の
教明なるべし


玉ゆ比ぐ玉

明石川

小笠原忠政居る元和五年尚郡城ありて忠政死後これを居る是を
押ひくし城墟なるとこゝより神ゐ池田出羽守こゝを居る府新に水門を開きて
船を通りしを府の標石川にこゝ今尚あり是を石波戸とゝ元和小笠原忠
の府今の明石の城と移れり 後右平記十二卷嘉吉元年赤松退城の事
明石船上の城郭と構ふるは是なり

龍蟠山観音寺密蔵院 船上村 真言宗浪速大学寺末寺 英創延喜比
年中なる二佛中間の大寺師地蔵菩薩観音と安置し赤播磨の一大
刹之末寺八ヶ寺寺宝数あり

山王社 密蔵院の 播州丹生山山王明神とゝろ

林村 船上の西にくゝ日村宮殿寺編記に云宝永林村 上宮神社 林村より巳丁上の丘にあり近郷
松浦村と石つゝ今村と称をなもこれあり 九月武印あり 巳ヶ村の氏神人吉龍又社大明神と
宝殿寺 真言宗 海川にて巳ヶ村の氏神 毘沙門正月三日開帳

鹿ヶ沙磧 林浦より西小豆島を海中十八里の間の浅瀬 上宮神社 林村より巳丁上の丘にあり近郷
の残りて藻の岩のごき所なる名付けるべし 巳ヶ村の氏神人吉龍又社大明神と
高うけ船くゝもあり名にけるべれいるるも安くて過ちみるべし

宝珠山十輪寺 地蔵院 明石郡に七佛薬師を建らるこゝ外に此寺の一神と造る因て世に八神薬師と云人里俗淡
真言宗 船上密蔵院の末寺あり 本尊薬師如来 眼三日光十二神あり
く蓮華乃粉を以て供ぶ

和坂村 王子村札場より八丁余にて此所なもうけて何とう宝ゝ沢迫ゝ 後右平記三十又巻之 播州坂の左
ゝるこの浦い地図なもうけて何とう宝ゝ沢迫ゝ 後右平記三十又巻之 播州坂の左
右のこい荊妻りの小篠あるこゝ今の中ゝ山ゝ後世平治ゝて設ひしみや今ゝ
左右のゝを稲荷山唐崎ゝこゝ今ひて住系乃地ゝ
府元 嘉吉軍記に和坂合戦い攝津後家城三国のこ赤松濃守入る性具の軍義教と眼る
ゝありて赤部綱ゝて歩嘉 播州へ帰りて其詩人と称る十七八里の間に城を構ふ事
小豆赤松常陸介則尚和坂の構ふ詩器と云て此

赤石 林村船江村との間 汀を去ること七八里大さ巳又天に方之甚巳甚赤 陸より見る
ゝ狭ひ船ゝ海中ゝ出ゝ見る 三月三日ゝ満ゝ見るゝ 群集し見る
水上に船ゝ見る 船ゝ浦ゝ見る
此石ゝ船ゝ見ゝ此ゝ人ゝ

慶命山坂上寺 鎌倉坂に右の岳 女の子ゝ

技倉城趾 吉田村 ○下津橋城趾 東 洋 朝霧陶器 前中谷村の焼ゝ南東に紙ゝ甚
船江 東西二村 此浜の鱠と揚ゝて甚味勝ゝ 浦雅今の医医物ゝ人弘美
て称賛ゝしていひ伝ゝ

大久保澤 大義ゝ宝ゝ 大岡松 大八幡光福寺の 墨石明神 金浦村中の氏神と
加古郡ゝ

本尊地蔵菩薩 大原寺 祖師堂 弘法大師

和坂

慶命山坂上寺

美言山弘上嚴光流

末寺御寺三月七月

廿一日ハ雜業あり

宗永の比の再建なり

尚郡先生寄附り

清水里 長池駅の西にあり 尚國又信濃

夫木 ちりたちて清みの里にとまれとは外にゆきてやうらん 常陸

清水川 神中の志ぐりの下流なり 宮ゐそ 清水の里の西に流れる也 清水流

藤江浦 松江の西にあり 俗〜江古八入に作る 名不分 今の民家の居地なり 素い幸憑 又抱撥 章奏壺と制を和名抄明石郡菊江に續る

夏の麓秋の王命奏と捧げ又物 人丸

平記に菊江の離と見へたり 古今 教考

季素三 ひろえの浦の浦にきつるあまとうたへん人 猿外く我と

江井ヶ島 八木より西西海東海とをへ 郷人相傳へて云ふ此村の西海辺に井東に井と二村あり 今西に井東に井と二村あり 此海岸 櫂〜有り 古今 海辺地中今も石木多ぎ 又八木村より 此海岸 又〜塩立曲れり 屏風浦 又汀と云ふ 一丁許 水 屏風のごとし 名付て海辺と云ふ 又七里乃浦 也 兵庫の海より 七里毎に庭 磯あり 也其一 其磯の中に馬石と唱る 抱 那ち馬 両海の村 これ海の風湾の嘉を免る 若 基 これと 櫂〜乃 初め六月 也百 法 養 長い汀 海 祭 馬藻 多く 採 ○工井ヶ島 地不 あり 由 井ヶ島 通 古名 〜

魚住浦 今東海西海中尾浜谷 西國ゑびと奥住の庭と云 若 紀 基の櫂く泊乃湊 今い 櫂 て里

民の居地 如尚 茅 奈 江井 海 又 ゑ

本朝文粋 一 重請修復播磨國魚住泊事

右臣伏見山陽西海南海三道舟船海行之程自樫生泊至韓泊一日行自韓泊至奥住泊一日行自魚住泊至火輪田泊一日行自大輪田泊至河尻一日行此皆行基菩薩計程所建置也而今公家唯修造輪田泊長慶魚住泊由是公私舟船一日一夜之内兼行自韓泊指輪田泊至十冬月風急暗夜星稀不知舳艫之前後無辨濵岸之遠近落帆棄楫居愁漂没由是毎年舟之蕩覆者漸過百艘人之没死者非唯千人中略 今修造件泊其新物充給播磨備前両國正税莫也早降聖朝援手之仁令脱天民為魚之歎凡厥便宜具載去延喜元年所獻意見之中不更重陳

延喜十四年四月廿八日 従四位上行式部大輔臣三善朝臣清行上封事

名寸隅乃松濱 寸家又欽二尼首足えんさう其さ尼 接とを拉姑く蛭 会我の舟則結の下名の陸 西海村あり 燃 ち文判 長 絶 赤松の幕下 文永年中 根 南

魚住城址 奥住の東 中尾村 西

住吉社 奥住の東 中尾村 祭祀 尼 産 攝社 高良 八幾 大海祇 芦 又芦浦 荒祇 巌島

東北二社の住吉乃内 毎年九月廿日祭礼あり 摂州住吉乃社人 兼門 祭 初 例

清冷山廻伽寺 西國村 霊 海 出 行 縁起 安

密藏院
明石川

王子

林檎池　大池なり其地水利ひらきさかりてをきさかりあとなりて切用人なる者とるの大なるものなり
明石の駅嚴硯表と刻して池端にあり即文集なり人さり

△如意寺　擂谷村にあり　擂谷村より一里　天台宗開基法道仙人なる地蔵なる山門鐘楼三
塔下より二里
重塔彷彿北に不動堂なる獅子縁　基　文殊　大師　常行堂　三昧堂　護摩堂
観音堂　大伽藍　一ヶ餘歳相續修造の地なり

△擂谷城趾　此谷村にあり城主義之助の長子の苗系なり
長治の幕下天正乃死忠あり今は塚あり

△日輪寺　雲光なる字に不思議谷村にあり城下より一里余天台宗開基行基なる手
観音本尊の観音雪村なる者の観音雪村
昏山西秀方と会せり　薬師　阿弥陀　老宝の松　長寿と
建立して今の堂宇なり　いわれ

△慶明寺　薬師寺　住吉神社　摂部の在細田村にあり宗神社なる又摩耶岩
村にあり　天神宮社家の川に浸りの山石なりあり

△八幡宮　世人天社の宮なる　宗神又庵　荒長足姫　玉依姫　大鷲熊　天皇　奥社天照皇神
辛神在安明寺　蓑田天皇　吳俗表天皇　此外摂社
伊川城趾　昔蓑村李畑にあり奥湖にあり　即中の
もり明石氏某これを攻る　惣社　井川の在池之村にあり
熱社　人延久三年勅造

△龍華山薄法論寺　なるこより二十余町小中之村にあり古宗なる地来寺
開基西なる上人なる坊谷にあり

△龍華山明王寺　中山村のつきあり古宗名村にあり古宗なる不動明王
開基西なる上人なる坊谷にあり

△性海寺　考なる和山なる和村中に寺あり　坊谷六院古宗開基行基なる阿弥陀如来
観音なる往古の勅願石の巨刹なり中興　釈　如幻なり十丁許奥に如幻の墓あり

△近江山近江寺　性海寺より一里ばかり古宗開基法道仙人なる観音
近所の新古不動十六羅漢なる其外什物多し
昔別不安治の勅願所なる水雄なる願成しなる仏事不再建して今近郷より拝まれ
△雄ヶ尾雌ヶ尾　非出の在なり　三本より三里ばかり墨の方なり
西山東西ヶ雙立て聖ヶ尾ともなる又丁牛雄ヶ尾元ともなる立樹なる
く小祠帝釋天と祭なり毎例祭九月十日の山なる最なり西の方雌ヶ
尾ヶ尾峯樹なると聞なりて小祠厳重なり祠前に舞台あり素盞嗚
尊稲田姫乃御夫婦を祠まる仏人と大己貴命此なる隣接まして
一百八十一神と養なり　東神出乃名あるなるなるなめなる乃名ふ
ひきく墳ヶ湯石法石の歌あり法石なる屈曲の石の霊なる其石
周なるのだなる窪なるなるなるなる法石なるなるなる仏なるなる又湯石大抵二尺
許ヶ左隆起して立なる色い名居の形なるなれて遊なるしなるなる
ヶ近郷の信なる吳と実なるして隣ヶ婚姻と祈者なる
△最明寺　雌ヶ尾の下にあり　鉢倉山と号ル　開基法道仙人なる者相模守時頼入道諸国巡行

雄子尾
雌子尾

此山中に
産する
薬草
集
コ
モ
ヨ
ミ
ス
ル
堅
香
子の
花
多く
生ひて

三月乃
初より
中ころ
まで
咲
あり
葉
ハ
ハ
ハ

近江寺
牡海寺
如意寺

牡海寺
如意寺

の時諸堂御寄附をもて編立坊舎七十余宇の大刹なりしが慈仁の
乱に天正の兵火に回禄して今なほの一宇を残せり真言宗にて
高野に属し座中に附属別当梅宝院あり

△神出城趾 唯に底の下西にあり城主庵門斎花次素松の一族にして建武の比より北軍家に属して京合戦に神南に戦ひ武功あり天正の乱に亡ぶ

△地中清水 誰石清水村より北に丁東小地中村に森あり林の中三間計 足摂州十 [illegible]

水の源一うそ世くこしを崇めし條

城を赤松上総介則房雑記に十水を定めし條

小野江清水 揖西郡 [illegible] 笹毋清水 揖西郡 [illegible] 星田若清水 [illegible] 揖西郡 [illegible] 山の細流を

花垣清水 揖西郡 [illegible] 小地清水 揖西郡 平井 御所清水 揖西郡田宇村辺物が谷 [illegible] 揖西郡 [illegible]

揖西郡 [illegible] 野中清水 [illegible] 野口清水 印南郡 [illegible] 落葉清水 [illegible] 印南郡 [illegible]

又某家に発を不乃清泉あり

一嵩國十水の内に名水に絶えるなり其村の長心を付猶り汲ミ
[illegible]せまゝきゆゝ水身に日毎に一杯の扶助ゝ清水未尽事多ゝ

十俵とゝせ三人々に手付不也

文亀三年二月 志水甲斐守

山清水を山の内也麓荒廃して猥雑物捨中間多者也

月日

いにしへの地中の清水の取る人れいりて山を志ふ人を汲む
[illegible]

[illegible]

山家集 [illegible]

むしし見ゝ地中の清水うゝ孫い我うげとりやうひ出ん 西行

清水の林の中に祖父松祖母松疑嘴虫の名本三株ありの中にも疑嘴
松の其枝の枝をとゞ[illegible]ゝ幼児を見れば疑ふことをやむ

地中清水
炭焼松

加東郡

清水寺　号所嶽山　摂丹播州の境なり　當山は千有餘年の大刹にして開基は法道仙人聖武天皇の御願なり　中頃は寛治の年光明上人天台宗なるを親鸞大師西國巡礼の砌服士比義毘沙門大講堂を安置し　常行堂三昧堂後白河建立　藥師堂地獄師建立　阿弥陀堂執行建立　二層塔かなる阿弥陀祇園女御　奥院かなる十一面観音帝御願道場再建なりて奥院は叢也。御法華堂。地蔵堂。観音堂。八幡。不動。天満宮。松風村雨松　後白河法皇御願　達摩　奥の院の右なり　後白河法皇御願　清水寺文明十二年再建　法印賢精　十二月十日干時応仁元年　法華堂　清水寺の傍　福富　毎年二月初午　大會　六月十八日　西坂　法華山　久米坂　明石　赤松氏龍墓　丹波坂の傍　月男　氏春　家則　祐春　秀則　後兵百余人山中に自害し　西坂　中山寺有馬道　丹波坂　東の方　清方　紐来乃至多〜

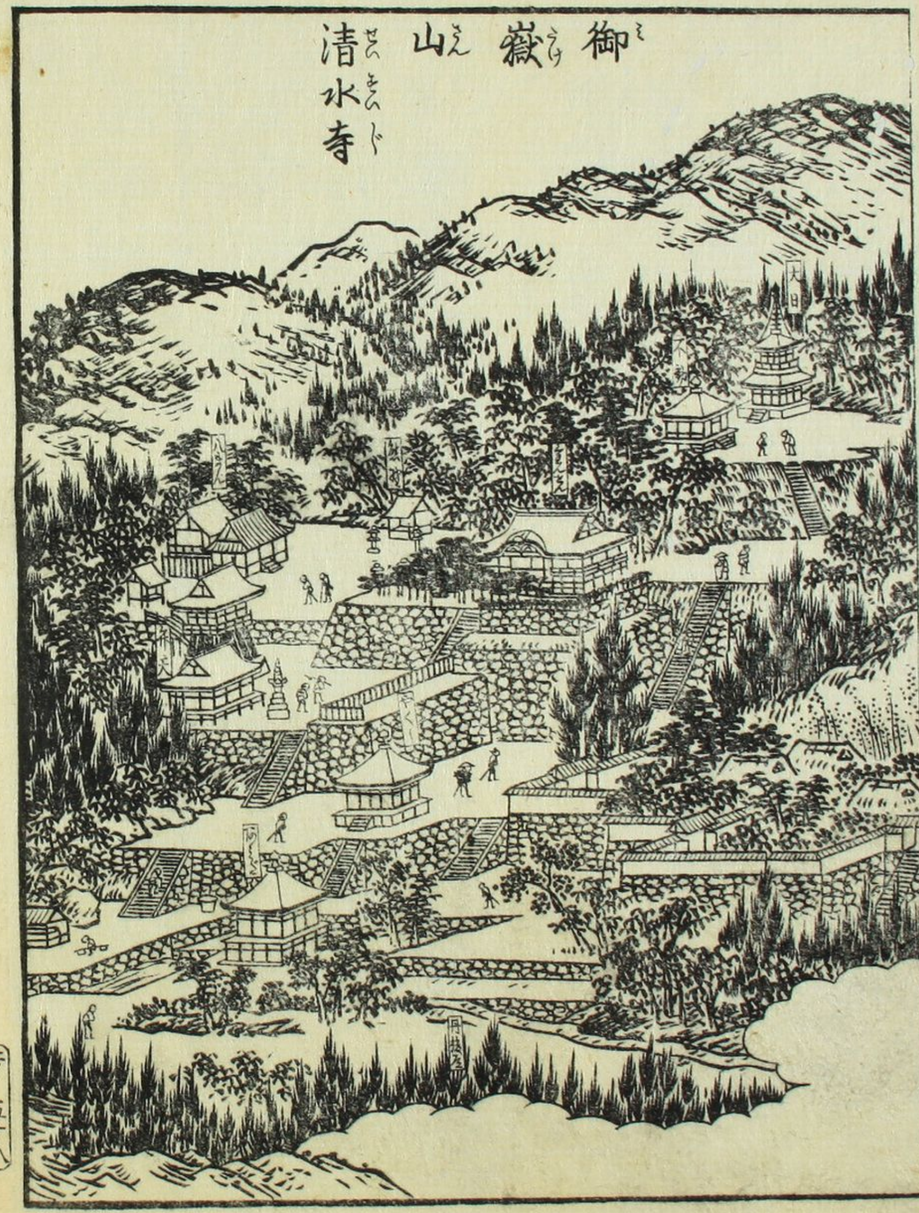
氏龍の家臣乃至大勇力　勝るに及ばず　諸兄と睦ぶべし

忠臣二心と抱く民官軍に帰順して足利義詮と表る真良帝に敵

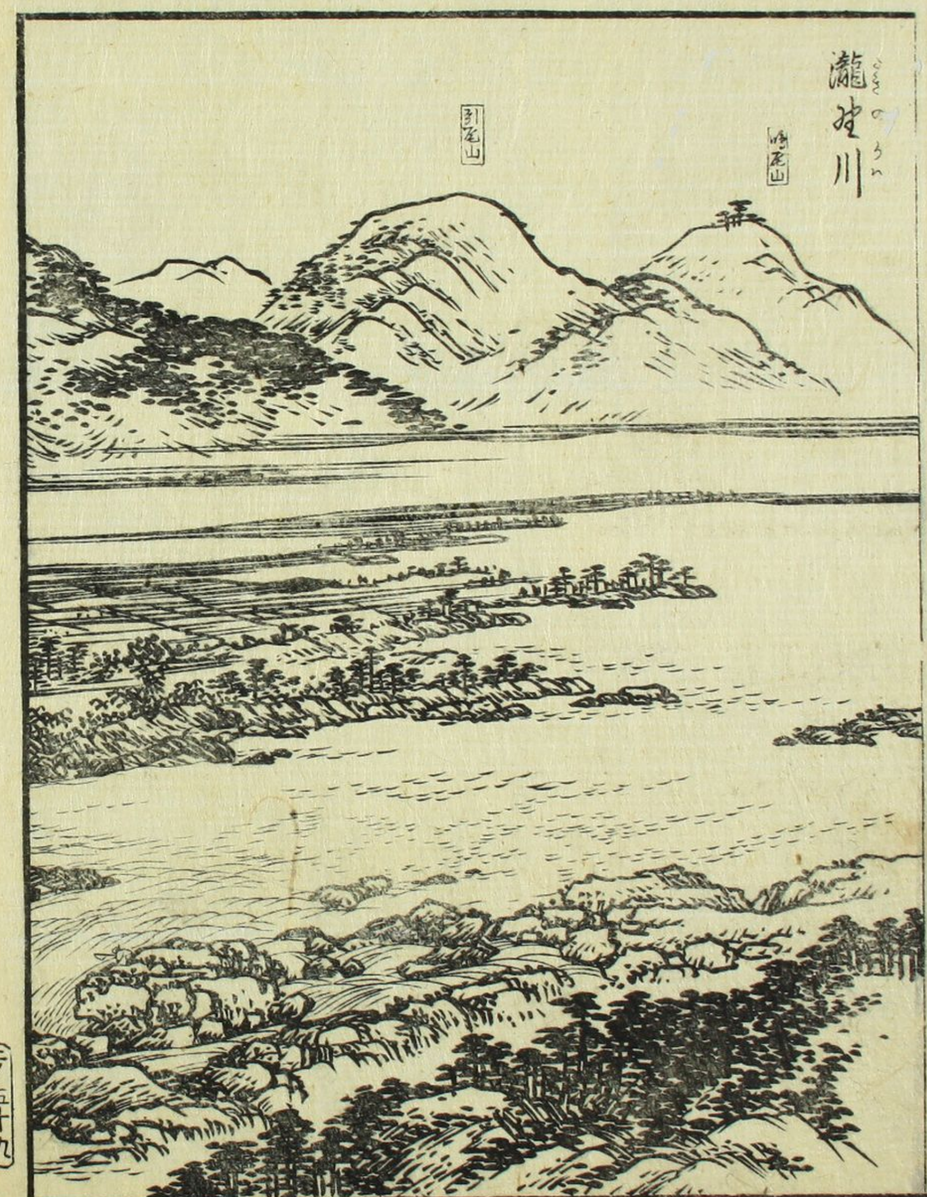
四人ぐ茶の関白師基と共に忠義の兵級を変る氏龍曰

危きと見て去い不義と〜〜二十五時と率ひて師基と親山の一屋敷

御嶽山清水寺



宮門山


瀧地川
刎尾山
鳴尾山

光明山

光明寺

多の数ケ所の城を築り来りて播磨を義経と源氏の戦ひ
自叔年又十七家士伊藤氏郡分村又郎ヶ又乙若丸を扶けて薩摩
へ走る

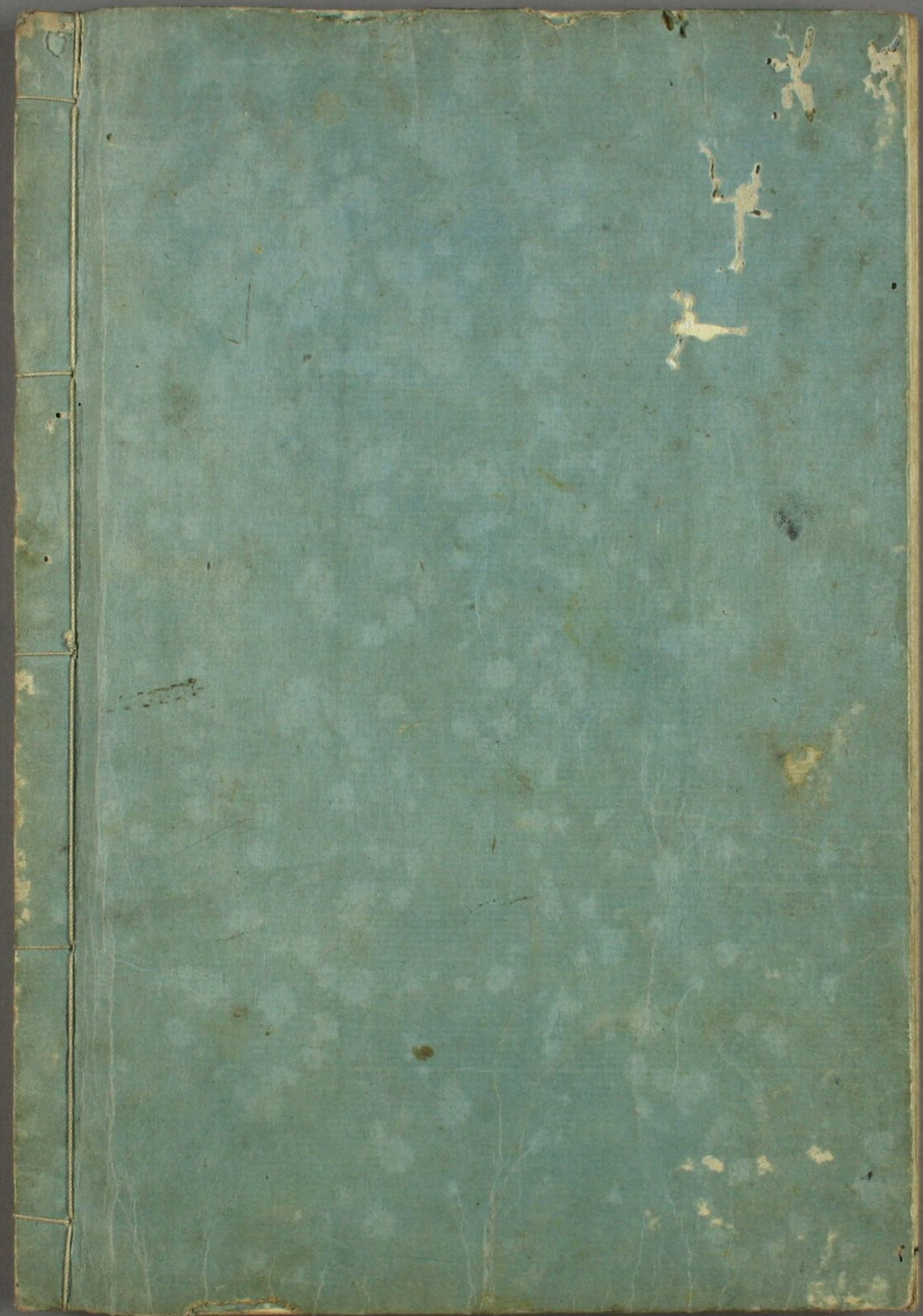
三草山古戦場 ほあの南三草村の東なり 十里ヶ谷くもいん

平家物語一谷の合戦の条に詳くしるす源義経一方金鶏山搦手より丹
波播磨の境三草山に陣を取平家は小松資盛有盛師盛三千余
騎三草山の西の陣と云源氏の大将蒲冠者小松殿の平家に敗北
し西の山を周とあげそれ平家の陣は周章狼ばいを源氏家しこと遁落
皆討又百余人を討取平家の大将資盛有盛忠房は面目を失ひ海より
八艘人ゝ乗り出

三草川 上三草下三草の名
りあり

瀧野川 ほあ村にあり 加古川の水上 川の東を瀧野町と云西を瀧中と云都合の地にて瀧
流急易く一町の間に舟渡し一あり川中川岸に巌石多く流れ激し
て流るゝ瀑布のごとし白波雲のごとく立て水声殷々幾い花
縄と解く一本と流れ又幾つにも別れ生の如く争奥多く
のぶり急流に打もまれ岩に当る散花の吉野に落花の如く渓蒼苔

を揉て皆時の数万を拾春日遠近の鶯宴に奏して英歌極宴の境
となるもの

光明寺 ほあ峯の山にあり 用基法道仙人本尊十一面観音 文殊堂 古堂
然地擁護 岡山 鎮守 二王門 講堂 経蔵 僧坊 十代 大慈院 若狭大師の
自画の像あり 諸人参詣

光明寺陣跡 光明寺にあり 観音の比丘羽尾氏と舎弟直義と確執ある直義家
利方して羽尾氏兵庫へ走りぞく 羽尾氏引尾の陣と構へ高師直の引尾にて合戦仕者
瀧野古城 上瀧野にあり赤松氏重の政資の居城なり七家家の末孫なり
明応年中の人なり今畑と称ありて名をとゞめ
鳴尾山 瀧野より西加那へ引尾山 光明寺より加西
郡へ越る道なり